袋井駅南土地区画整理事業
に伴う発掘調査報告書１

大門遺跡
発掘調査報告書

袋井駅南土地区画整理事業に伴う
第１２～１４次発掘調査報告書

２０２３

静岡県袋井市教育委員会

袋井駅南土地区画整理事業
に伴う発掘調査報告書１

大門遺跡
発掘調査報告書

袋井駅南土地区画整理事業に伴う
第１２～１４次発掘調査報告書

２０２３

静岡県袋井市教育委員会

例　言

１．本書は静岡県袋井市高尾 1117 ほかに所在する大門遺跡の平成 30 年度発掘調査報告書である。

２．調査は袋井駅南都市拠点土地区画整理事業に伴って袋井市袋井駅南都市拠点土地区画整理組合から依頼を受け、袋井市教育委員会が実施した。確認調査を平成 25 年８月 26 日から８月 28 日を行い、本発掘調査を平成 30 年７月 11 日より開始し、令和４年度現在にいたるまで継続中である。

３．発掘調査および整理作業に係る経費は袋井市袋井駅南都市拠点土地区画整理組合が負担した。また、調査の遂行にあたり多大なるご協力をいただいた。記して感謝します。

４．発掘調査は袋井市教育委員会が主体となり、生涯学習課文化財係の原未貴が担当した。

５．発掘調査によって出土した遺物、関係資料・記録はすべて袋井市教育委員会が保管している。

６．空中写真、基準点測量、遺構図作成、土器実測業務の一部を（株）フジヤマに委託した。

７．発掘調査･整理作業および報告書作成にあたっては、以下の方々のご指導･ご協力を得た。記して感謝する。（順不同・敬称略）

鈴木敏則、平野五郎、松井一明、河合修、五島康司、田村隆太郎、溝口彰啓

凡　例

１．挿図中のレベルは海抜、方位・測量図については国土座標真北 (世界測地系) を使用している。

２．本書で用いた色彩に関する用語、記号は新版『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1993) をもとに標記した。

３．遺構・出土遺物図の縮尺は、図中にスケール等で示した。

４．遺構番号について

検出した遺構の下記の記号で表す。

ＳＡ＝柵跡、ＳＢ＝竪穴住居跡、ＳＤ＝溝、ＳＫ＝土坑、ＳＨ＝堀立柱建物跡、

ＳＸ＝その他の遺構、

５．挿図中で「Ｓ」は礫、「Ｐ」は土器、「Ｃ」は炭化物を示す。

６．実測図を掲載した弥生土器・土師器・須恵器等の土器及び土製品・金属製品・石器には、それぞれ通し番号を付し、文中・遺構図版で共通して用いている。

目　次

第１章　遺跡の位置と環境　1
　１．地理的環境　1
　２．歴史的環境　1
　３．大門遺跡の調査履歴　3

第２章　事業の経緯　5

第３章　調査の方法と体制　7
　１．調査の方法　7
　２．体制　7
　３．調査日誌抄　8

第４章　発掘調査の成果　9
　１．第 12 次調査　9
　　1-1. 弥生時代の遺構・遺物
　　1-2. 古墳時代の遺構・遺物
　　1-3. 奈良時代以降の遺構・遺物
　２．第 13 次調査　33
　　2-1. 弥生時代の遺構・遺物
　　2-2. 古墳時代の遺構・遺物
　　2-3. 奈良時代以降の遺構・遺物
　３．第 14 次調査　44
　　3-1. 弥生時代の遺構・遺物
　　3-2. 古墳時代の遺構・遺物
　　3-3. 奈良時代以降の遺構・遺物

第５章　まとめ　59

引用参考文献一覧

写真図版

抄録

挿図目次

図１　周辺遺跡分布図
図２　袋井駅南土地区画整理事業の範囲と大門遺跡
図３　平成 30 年度調査区位置図
図４　第 12 次調査区全体図
図５　第 12 次調査区全体図（拡大１）
図６　第 12 次調査区全体図（拡大２）
図７　ＳＢ１・３・４
図８　ＳＢ２・５・８・10・12
図９　ＳＢ６・７・９・11
図 10　ＳＢ 13・14/ ＳＨ５・８/ ＳＫ１/ ＳＸ６
図 11　ＳＫ２・３/ ＳＸ５・９～ 11
図 12　ＳＸ 11（土器出土状況）
図 13　遺物図版１
図 14　遺物図版２
図 15　遺物図版３
図 16　遺物図版４
図 17　ＳＨ１・２
図 18　ＳＨ３・４/ ＳＰ 700・701
図 19　ＳＨ６・７
図 20　ＳＨ９・10
図 21　遺物図版５
図 22　第 13 次調査区全体図
図 23　ＳＨ 14・19/ ＳＫ５
図 24　ＳＫ６/ 遺物図版６
図 25　ＳＨ 11・12/ ＳＢ 15
図 26　ＳＨ 15 ～ 17
図 27　ＳＨ 20・13
図 28　ＳＨ 18/ ＳＫ４/ ＳＡ１～４
図 29　遺物図版７
図 30　第 14 次調査区全体図
図 31　ＳＨ 21 ～ 23
図 32　ＳＨ 24 ～ 26
図 33　ＳＨ 27・28/ ＳＰ 2445
図 34　ＳＨ 29/ ＳＫ９/ ＳＰ 2497/ ＳＸ 14
図 35　遺物図版８
図 36　遺物図版９

表目次

表１　大門遺跡・掛之上遺跡発掘調査一覧
表２　平成 30 年度発掘調査区一覧
表３　遺物観察表

写真図版目次

ＰＬ．1
1．　大門遺跡近景　南西から
2．　第12次調査区完掘全景　南から
ＰＬ．2
1．　第12次調査区完掘全景　北から
2．　第12次調査区ＳＸ11土器出土状況　北西から
ＰＬ．3
1．　第12次調査区ＳＢ１・2
2．　第12次調査区ＳＢ３・4
3．　第12次調査区ＳＢ５　北から
ＰＬ．4
1．　第12次調査区ＳＢ８　西から
2．　第12次調査区ＳＢ９　南から
3．　第12次調査区ＳＢ11　北から
ＰＬ．5
1．　第12次調査区ＳＨ１
2．　第12次調査区ＳＨ２～4
3．　第12次調査区ＳＨ5、ＳＢ13・14
ＰＬ．6
1．　第12次調査区ＳＨ６・7
2．　第12次調査区ＳＨ６　北西から
3．　第12次調査区ＳＨ８～10
ＰＬ．7
1．　第13次調査区完掘全景
ＰＬ．8
1．　第13次調査区ＳＨ11
2．　第13次調査区ＳＨ12　北から
3．　第13次調査区ＳＨ13　北から
ＰＬ．9
1．　第13次調査区ＳＨ15・18・19
2．　第13次調査区ＳＢ２　北から
3．　第13次調査区ＳＫ５　西から
ＰＬ．10
1．　第14次調査区完掘全景　東から
2．　第14次調査区ＳＤ23　東から
ＰＬ．11
1．　第14次調査区ＳＨ21　南西から
2．　第14次調査区ＳＨ25　北から
3．　第14次調査区ＳＨ26・27　北東から
ＰＬ．12
1．　第14次調査区ＳＨ28　南から
2．　第14次調査区ＳＫ７　南西から
3．　第14次調査区ＳＸ14　西から
ＰＬ．13
1．　遺物11・1
2．　遺物10
3．　遺物12
ＰＬ．14
1．　遺物9
2．　遺物13
3．　遺物14
4．　遺物19
5．　遺物28
6．　遺物29
7．　遺物30
8．　遺物47
ＰＬ．15
1．　遺物48
2．　遺物53
3．　遺物54
4．　遺物56
5．　遺物58
6．　遺物61
7．　遺物78
8．　遺物88

第１章　遺跡の位置と環境

１節　地理的環境

袋井市は静岡県西部に位置し、遠州灘に臨んでいる。南北に長い市域の北東から西側にかけて太田川が通り、中央部では掛川市より流れる原野谷川がその流れを南に向け、太田川と合流し太平洋へ注いでいる。原野谷川の北側には旧東海道の宿場町として発展した袋井地区、南側には JR 東海道本線袋井駅を中心とする高尾地区が位置している。太田川、原野谷川の両岸には沖積地が広がり、袋井市の穀倉地帯となっている。市の南東部には小笠山丘陵があり、小笠沢川や弁財天川、三沢川などの小河川により谷が形成され入り組んだ地形を呈している。

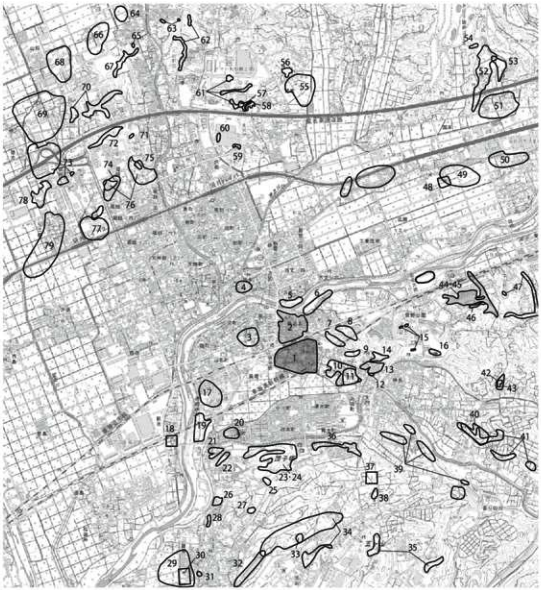
大門遺跡はＪＲ袋井駅の南側､小笠山西北山麓の標高約 16m を測る段丘の先端に位置する。この段丘をまわるように、北～西側に原野谷川が流れる。JR 東海道本線によって段丘は南北に分断されているが、明治 21 年に開通した東海道鉄道建設のために掘削されたものであり、以前は陸続きであった。現在、JR 東海道本線の北側を掛之上遺跡、南側を大門遺跡として登録しているが、ひとつの大きな集落であったと考えられている。大門遺跡の南側は尾根間の谷で、近年まで水田地帯であった。

２節　歴史的環境

小笠山丘陵上で縄文時代の集落が２箇所確認されている。縄文時代中期の長者平遺跡と、後期の大畑遺跡である。住居跡や土坑墓のほか、貝塚が見つかっている。

弥生時代中期から後期にかけて市内の遺跡の数は大幅に増加する。稲作の伝来にともない太田川、原野谷川が造る沖積地に集落を築くようになったと推測される。太田川の自然堤防沿いに鶴松遺跡、徳光遺跡、堀越ジョウヤマ遺跡、土橋遺跡などが並んで確認され、土器や木製品なども良好な保存状態で残されていた。一方、小笠山丘陵上では大門・掛之上遺跡のほか、周囲の丘陵上でも竪穴住居や方形周溝墓群が確認されている。掛之上遺跡は周辺の区画整理事業にともない、これまでに 106 次にもわたる発掘調査が行われ、弥生時代の方形周溝墓群や竪穴住居が発見された。大門遺跡の南側の丘陵上には団子塚遺跡があり、弥生時代中期の墓域や後期の集落が確認され、大門遺跡の墓域とも推測されている。愛野向山Ⅱ遺跡では、丘陵を切り込んで造られた竪穴住居や土壙墓などが確認された。土壙墓より小銅鐸が出土している。

古墳時代の遺跡としては、大門遺跡の範囲内に６世紀前半の円墳である大門大塚古墳がある。円礫小口積の横穴式石室で、須恵器や金銅製馬具・刀剣類・トンボ玉が出土した。大門遺跡の南側の丘陵では石室を持つ団子塚古墳群が、大門遺跡の東側では地蔵ヶ谷横穴群・金山横穴群などの横穴墓群が確認されており、古墳時代後期に異なる墓制が取り入れられている点が特徴である。



1 大門遺跡
2 掛之上遺跡
3 三門遺跡
4 袋井宿遺跡
5 方丈遺跡
6 小野田遺跡
7 地蔵ヶ谷遺跡
地蔵ヶ谷横穴群
地蔵ヶ谷古墳群
8 井守塚古墳群
9 大門山古墳群
10 大門Ⅲ遺跡
11 丸尾氏館
12 堂下横穴群
13 堂下遺跡
14 渋垂神社上古墳群
15 金山古墳群
16 金山遺跡
17 関口遺跡
18 加賀爪氏館
19 柳原遺跡
20 高尾向山Ⅱ遺跡
21 谷坂古墳群
22 北山遺跡・古墳群
23 団子塚古墳群
24 団子塚遺跡
25 北原遺跡
26 山畑遺跡・古墳群
27 諸井大学院遺跡
28 王子遺跡・古墳群
29 諸井十二所遺跡
30 諸井十二所居館
31 楠宮遺跡
32 貫名地遺跡
33 浅羽北原遺跡
34 貫名地古墳群
35 五ヶ山古墳群
36 高尾向山Ⅰ遺跡
37 平芝陣屋跡
38 浅間神社古墳
39 雲座古墳群
40 長者平遺跡
41 長者平古墳群
42 宝野金山遺跡
43 宝野金山古墳群
44 愛野向山Ⅱ遺跡
45 愛野向山古墳群
46 愛野向山横穴群
47 愛野向山古墳群
48 貫名氏館跡
49 国本Ⅱ遺跡
50 国本Ⅰ遺跡
51 不入斗Ⅰ遺跡
52 浅間山遺跡
53 不入斗Ⅱ遺跡
54 東山遺跡
55 久野城跡
56 蔵王権現神社遺跡
57 久能東山遺跡
58 日吉神社裏横穴群
59 東別所横穴群
60 東別所古墳群
61 久能東山古墳群
62 道ヶ谷古墳群
63 道ヶ谷横穴群
64 川田遺跡
65 北の谷横穴群
66 鶴田Ⅰ遺跡
67 鶴松Ⅰ号墳
68 鶴田Ⅱ遺跡
69 鶴松遺跡
70 機ヶ谷古墳群
71 八幡山横穴群
72 ズン坂横穴群
73 徳光遺跡
74 堀越ジョウヤマ遺跡
75 海蔵寺古墳群
76 堀越城跡
77 堀越遺跡
78 小山角田遺跡
79 土橋遺跡

図１　周辺遺跡分布図

奈良時代の遺跡では、掛之上遺跡は山名郡衙である可能性が指摘されている。中央部 (第 5・6・8 次調査区) から地方官衙の正倉と見られるロ字型に配置された大型掘立柱建物群が、その西側の政庁区とみられる場所から長殿風建物や、それらを区画する幅 4 mの溝が検出された。また、大門遺跡においても同時期の 2 棟の総柱建物が確認されており、郡衙にともなう建物と推測されている。しかし、当該時期の出土遺物が少ないことと、文字資料の出土がないことから、具体的な役所名は明確ではない。坂尻遺跡ではこれまでの調査により、柵列に囲まれた掘立柱建物やかまどをともなわない竪穴住居が発見され、出土した墨書土器から佐野郡衙の屑家や駅家であると推定されている。

3節　大門遺跡の調査履歴

掛之上遺跡や大門遺跡の存在は古くから知られていたようで、昭和 5 (1930) 年発行の「静岡県史」には簡単な記述が見られる。昭和 37(1962) 年に始まる東海道新幹線の建設にともない、大門遺跡で本格的な調査が行われた。その後も袋井南公民館（現袋井南コミュニティセンター）周辺の整備関連の発掘調査が複数回にわたって行われたが、いずれも遺跡の東半に集中しており、西半（田端地内）での発掘調査は今回が初である。以前は JR 東海道本線近くの果徳寺付近を大門Ⅱ遺跡、袋井市立中央・南公民館付近を大門Ⅰ遺跡と呼称してきたが、同一遺跡である結果を得たことにより平成 18 年に範囲を統合して大門遺跡の名称に改めた。

表 1 大門遺跡・掛之上遺跡発掘調査一覧

遺跡名	調査名称	調査年度	調査原因	調査主体	調査概略
大門Ⅰ遺跡	第 1 次	昭和 37 年度	東海道新幹線建設	静岡県教委	遺構の検出は無く、弥生時代中期～後期・古墳時代前期・奈良時代の土器が出土した。
	第 2 次	昭和 57 年度	袋井南公民館建設	袋井市教委	弥生時代中期～後期の竪穴状遺構・大型掘立柱建物・方形周溝墓等、古墳時代～奈良時代の大型掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物・土廣墓等が検出され、弥生土器、須恵器、中近世の陶磁器が出土した。
	第 3 次	昭和 58 年度	袋井南公民館外構建設	袋井市教委	弥生時代中期～後期の土坑・柱穴が検出され、弥生土器、石器、古墳時代後期末～奈良時代・鎌倉・室町時代の土器・陶器が出土した。
	第 4 次	昭和 62 年度	袋井市消防団消防車庫建設	袋井市教委	弥生時代中期～後期の竪穴住居、土坑、古墳時代前期の掘立柱建物、江戸時代の溝等が検出され、弥生土器、石器、須恵器が出土した。
	第 5 次	平成元年度	袋井市保健センター建設	袋井市教委	弥生時代後期・古墳時代後期の土坑や溝、鎌倉時代の掘立柱建物が検出され、弥生土器片及び須恵器、中近世の陶磁器が出土した。

大門遺跡	第６次	平成 18 年度	店舗建設	袋井市教委	古墳時代の竪穴住居及び土坑を検出し、弥生土器が出土した。
	第７次	平成 19 年度	市道田端掛之上線建設事	袋井市教委	弥生時代の竪穴住居及び土坑・溝を検出し、弥生土器が出土した。
	第８次	平成 18 年度～21 年度	地方道路整備	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	弥生時代の竪穴住居及び方形周溝墓・土坑、中世の溝を検出し、弥生土器・石器・中世陶磁器が出土した。
	第９次	平成 19 年度	個人住宅建設	袋井市教委	弥生時代の土坑等を検出し、弥生土器が出土した。
	第 10 次	平成 20 年度	市道田端掛之上線建設	袋井市教委	古墳時代の竪穴住居及び土坑を検出し、弥生土器・土師器等が出土した。
	第 11 次	平成 21 年度	個人住宅駐車場建設	袋井市教委	弥生時代から奈良時代の土坑等を検出し、弥生土器等が出土した。
掛之上遺跡	第１次	昭和 49 年度	袋井駅前土地画整理事業	袋井市教委	弥生時代中期～後期の方形周溝墓等、古墳時代の掘立柱建物、狐塚古墳の前方部、鎌倉時代～江戸時代の土廣墓等が検出された。
	第２次	昭和 57 年度	個人住宅建設	袋井市教委	弥生時代の方形周溝墓・土廣墓等、江戸時代末期の住宅が検出された。
	第３次	昭和 63 年度	駅前第一区画整理事業	袋井市教委	弥生時代の方形周溝墓、奈良時代の大型掘立柱建物が検出された。
	第４次	平成９年度	原野谷川社会環境基盤重点河川事業	(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所	弥生時代後期の土坑、古墳時代後期の掘立柱建物等が検出された。
	第５次～第 106 次	平成 11 年度～25 年度	駅前第二区画整理事業	袋井市教委	弥生時代中期～後期の方形周溝墓等、古墳時代の豪族居館、奈良時代の郡衙正倉等が検出された。

２章　事業にいたる経緯

大門遺跡の所在する袋井市高尾にはJR袋井駅があり、市の中心地として開発が進められてきた。昭和47～平成９年にかけて北商店街エリアの袋井駅前第一土地区画整理事業が、平成10～27年にかけて袋井駅前第二土地区画整理事業が行われ、袋井駅周辺の姿は大きく変化した。これらの土地区画整理事業の範囲内には掛之上遺跡が所在し、106次に渡って発掘調査が実施された。

今回の発掘調査は、袋井駅南都市拠点土地区画整理事業にともなうものである。JR袋井駅南口周辺の田端地区を主な対象とした区画整理事業で、その対象地の半分以上が周知の埋蔵文化財「大門遺跡」の範囲内であった。平成26年８月26～28日に確認調査を実施し、遺跡の範囲と深さの確認を行った。その結果、おおよそ従来登録されていた範囲の地下20～80㎝で包含層や遺構を確認することができた。その後の土地区画整理組合との協議の結果、遺跡範囲内の大部分は切土による宅地造成が行われるため、発掘調査が必要とされる個所は計約40,000㎡を超えることが分かった。区画整理事業の進捗と合わせて、平成30年から部分的に調査進めることとし、長期的な調査となると想定された。

平成29年10月16日付けで袋井市袋井駅南都市拠点土地区画整理組合より「発掘調査依頼書」が提出されたことから、平成30年５月２日付けで静岡県教育委員会教育長あてに、文化財保護法93条の１において「埋蔵文化財発掘の届出書」を提出する。静岡県教育委員会より６月６日付け教文第433号の２において、発掘調査の指示があった。その後、６月26日付けで文化財保護法99条の１において「埋蔵文化財発掘調査について」（袋生第58号）を提出した。発掘調査の範囲については、袋井市袋井駅南都市拠点土地区画整理組合と協議の上決定している。

平成30年度７月11日より発掘調査を開始し、令和４年度にいたるまで継続中である。発掘調査と併行して、出土遺物の洗浄・接合・注記などの基礎整理作業や、図面の整理作業、土器実測を実施した。令和２年度より報告書作成作業を開始する。

表２　平成30年度発掘調査区一覧

調査区	現地作業期間	面積
第12次調査区	H30.7.2～11.26	1,105㎡
第13次調査区	H30.11.26～H31.2.4	985㎡
第14次調査区	H31.2.1～3.5	241㎡

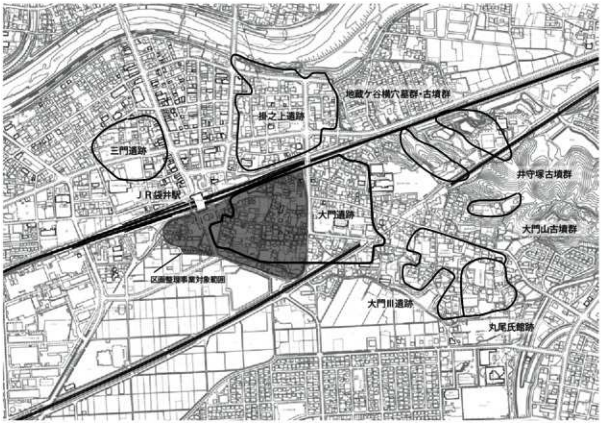


図２　袋井駅南土地区画整理事業の範囲と大門遺跡

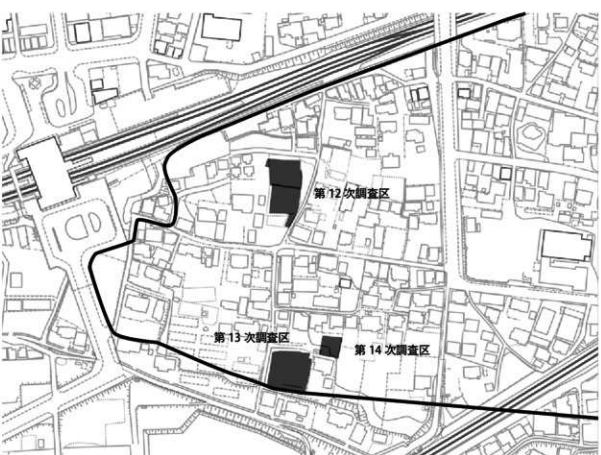


図３　平成 30 年度　調査区位置図

３章　調査の方法と体制

１節　調査の方法

発掘調査対象地は合計約 42,000㎡に相当するため、複数年度に分けて調査を実施する。発掘調査区は区画整理事業の計画に沿い、土地区画整理組合および袋井市都市計画課と協議して決定した。事前に既存建物の解体・撤去のうえ、発掘調査を開始する。

表土はバックホーにて除去した。基準点測量は（株）フジヤマに委託し、光波測距儀によって行った。全体図についても（株）フジヤマに委託し、空中測量から 1/50 及び 1/200 スケールの図面を作成した。個別の遺構図は必要に応じ 1/20 もしくは 1/10 スケールで人力により作図した。空中写真撮影は（株）フジヤマに委託し、ラジコンヘリにモノクロフィルムカメラ、デジタルカメラを搭載し撮影を行った。そのほかの写真は、小型カメラ１台（35㎜版カラーポジフィルム）、中型カメラ１台（6 × 4 版、カラーフィルム）、デジタルカメラを使用した。

２節　調査の体制

調査指導機関　静岡県教育委員会　　調査機関　袋井市教育委員会

平成 30 年度

教育長　　鈴木典夫
教育部長　　伊藤秀志
生涯学習課長　　杉山明子
生涯学習課主幹兼文化財係長　　白澤崇
文化財係　　水野雅彦、北嶋未貴、鈴木寿美子

発掘調査・遺物整理従事者

岩本愛子、岡山茂樹、加藤和秋、横田務、金原正治、雪島和夫、松本宣義、前嶋さとし、萩田権治、永井攻、金原知一、金原和夫、中崎絹代、冨田克廣、植田嘉明、鈴木智、竹内偉夫、松下博、田代佳延、中村房男、原利秋、山本留美子、牧野由真子 、長井由美子、河原崎洸希、立木菖、外山真子 (順不同・敬称略)

3節　調査日誌抄

7月2日　第12次調査（北）区茶や木の根の伐根
7月1～2日　重機による表土掘削
7月17日　人力による掘削開始
9月28日　ほぼ完掘となる
10月1～3日　空撮に向け、調査区およびその周辺の清掃
10月4日　第12次調査（北）区空撮、空中測量、遺構の写真撮影を行う
10月10～12日　第12次調査（北）区の埋め戻し、第12次調査（南）区の重機による表土掘削
10月15日　第12次調査（南）区人力による掘削を開始
10月16～17日　遺構検出を行う
10月18日　遺構掘削を開始
11月19・20日　空撮に向けて調査区およびその周辺の清掃
11月21日　第12次調査（南）区空撮、空中測量、遺構の写真撮影を行う
11月26日　第12次調査（南）区埋め戻し
11月26～29日　第13次調査区重機による表土掘削
12月3～6日　遺構検出
12月7日　遺構掘削
1月11・12日　第13次調査区重機による追加掘削
1月28～30日　空撮に向けて調査区およびその周辺の清掃
1月31日　空撮
2月1日　第14次調査区重機による表土掘削
2月4日　第13次調査区埋め戻し、第14次調査区人力による掘削開始
2月5・6日　遺構検出
2月7日　遺構掘削開始
2月25～3月1日　空撮に向けて調査区およびその周辺の清掃
3月2日　第14次調査区空撮、空中測量、遺構の写真撮影を行う
3月4日　第14次調査区遺構の写真撮影を行う
3月5日　第15次調査区の重機掘削
3月15日　第15次調査区の遺構掘削終了、養生をして平成30年度の発掘作業は終了とする

4章　発掘調査の成果

平成30年度は3箇所の発掘調査を実施し、それぞれ第12次～14次調査区の名称をつけた。遺構番号および遺物番号は第12次調査より連続した番号を振り、詳述することとする。

1節　第12次調査

第12次調査は大門遺跡の北西部に位置し、南北に分けて反転して発掘調査を行った。面積は合わせて1,105㎡である。基本層序は概ね以下のとおりである。

Ⅰ層　砂利層　客土
Ⅱ層　黄褐色土　表土
Ⅲ層　褐色土　遺物包含層
Ⅳ層　明黄褐色土　地山　遺構確認面

Ⅳ層にて遺構を確認するまでに、表土を30～40㎝除去した。遺構確認面の標高は17.0～17.3 mで、南東から北西方向にかけてゆるやかに傾斜する。

弥生時代の竪穴住居14棟、掘立柱建物10棟のほか、土坑やピットを検出した。近世以降の開発により、南北・東西に横断する溝が掘られている。また、中央部分は遺構面が広く削平を受け、確認できた遺構はわずかである。

1-1. 弥生時代の遺構・遺物

ＳＢ１　（図7）

平面形は南北に長い長楕円形で、長軸6.4 m、短軸5 mを測る。壁溝と柱穴のみで、掘り方や貼床、炉跡は確認できなかった。壁溝の幅は0.25 mである。南東部は攪乱により遺構面から深さ20㎝ほど削平されており、壁溝は全周しない。西側では2本の溝が重なるようにあることから、建て替えが行われた可能性もある。柱穴はＳＰ151・339・405が該当すると考えられ、四本柱が四角形に配置されていたと推測する。壁溝や柱穴から弥生土器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

ＳＢ２　（図8）

ＳＢ１の東隣に位置する竪穴住居で、ＳＢ１と一部が重なり合う。南側半分が攪乱により削平されており、北側の壁溝の一部を確認できるのみである。柱穴の特定も難しい。残存部分で短軸5.9 m、長軸6.4 m、壁溝の幅は0.25 mで、南北に長い長楕円形と推測する。壁溝から弥生土器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

ＳＢ３　（図7）

調査区の北東角で壁溝のみを確認した。壁溝の幅は0.25 m、残存径6.2 mである。壁溝から弥生土器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

図4　第12次調査区全体図

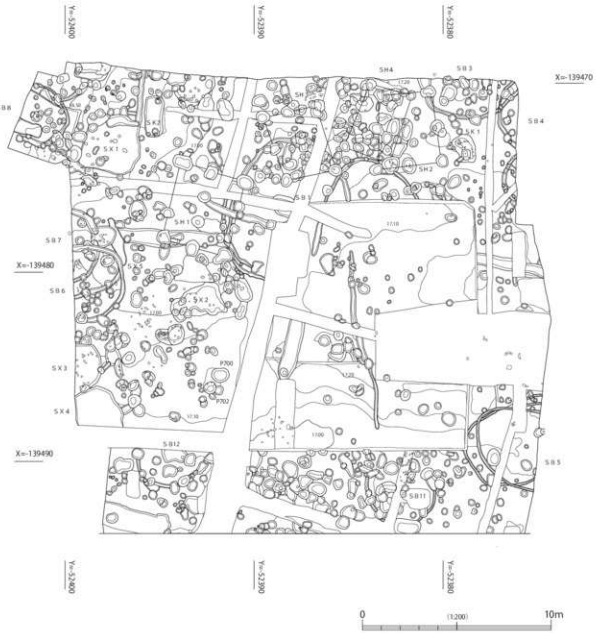


図５　第 12 次調査区全体図（拡大１）

ＳＢ４　（図７）

調査区の北東角で壁溝のみを確認した。壁溝の幅は 0.23 m、残存径 5 mである。壁溝から弥生土器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

ＳＢ５　（図８）

東端が調査区外へと続いており、検出したのは一部である。平面形は円形と推測でき、残存径は 4.1 mである。壁溝と柱穴のみを確認し、掘り方や貼床・炉跡は検出できなかった。壁溝は２本がほぼ同じ規格でわずかに東西にずれて重複しており、建て替えの可能性が考えられるが、出土遺物が乏しく時期差等は不明である。壁溝の幅はそれぞれ約 0.14 mである。ＳＰ 219・221・223 が柱穴に該当する可能性があり、四本柱が四角形に配置されていたと考えられる。これらの柱穴から弥生土器の小片が出土しているが、図示できるものはない。

図6　第 12 次調査区全体図（拡大2）

ＳＢ６・７　（図９）

第 12 次調査区西端にて壁溝のみが確認されている。半分以上が調査区外で、全体形は不明である。ピットが重複しており、柱穴も明瞭ではない。ＳＢ６の残存部分は径 3.85 m、壁溝の幅 0.2 m、ＳＢ７の残存部分は径 3.95 m、壁溝の幅 0.24 mである。

ＳＢ８　（図８）

調査区の北西端で見つかった竪穴住居で、西半は調査区外となる。壁溝のみで、掘り方や貼床は確認できなかった。平面形は円形と推測でき、残存部の径は 3.15 m、壁溝の幅は 0.18 mである。ＳＢ８と重複して複数のピットや竪穴状の遺構が見られ、柱穴は明瞭ではない。

ＳＢ９　（図９、遺物図版１）

平面形は楕円形で、長軸 4.1 m、短軸 3.6 mを測る。壁溝の幅は 0.15 mで、北東・南部分に近現代の攪乱を受け、壁溝の一部は消失している。掘り方や貼床・炉跡は確認できなかった。ＳＰ 910・913 が柱穴に該当する可能性があるが、その他のピットの重複もあり不明瞭である。中央付近の地山直上から弥生時代中期の白岩式の壺や台付甕の破片（１～５）が見つかっている。

ＳＢ 10　（図８）

建物の半分は後世の削平を受け残存していない。残存している最大径は 3.46 m、壁溝の幅は 0.2 mである。ＳＰ 1658 が柱穴に該当するか。柱穴や壁溝からの出土遺物がなく、時期の詳細は不明であるが、周辺の竪穴住居と同様弥生時代に造られたものと推定する。

ＳＢ 11　（図９）

南北に分割した調査区の境界に位置する竪穴住居で、平面形は円形である。長軸 3.83 m、短軸 3.47 m、壁溝の幅は 0.18 mである。後世のピットや攪乱が重なり、柱穴は明瞭ではないが、ＳＰ 652 がそれに該当するか。壁溝からは弥生土片が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＢ 12　（図８）

北半は攪乱を受け残存しておらず、南半の壁溝と柱穴を確認した。残存する最大径は 4 m、壁溝の幅は 0.19 mである。ＳＰ 802・804 が柱穴と推測する。柱穴から弥生後期の土器が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＢ 13　（図 10）

建物の東半が残存してない。残存する最大径は 5.35 m、壁溝の幅は 0.22 mである。ＳＸ８と重複していることもあり、柱穴は不明瞭である。出土遺物はなく時期も明確ではないが、周囲の竪穴住居と大きくは変わらないものと推測する。

ＳＢ 14　（図 10）

西半はＳＸ６に切られていて残存していない。残存する最大径は 2.8 m、壁溝の幅は 0.19 mである。ＳＰ 977･985 が柱穴か。柱穴や壁溝から出土遺物がなく、時期も明確ではないが、周囲の竪穴住居と大きくは変わらないものと推測する。

ＳＨ８　（図 10）

梁間１間、桁行１間の建物である。遺構主軸は N-13 度 - E である。遺構規模は梁行 2.8 m、桁行 3.14 mを測る。柱穴から弥生土器の小破片が出土したが、図示できるものはない。

ＳＫ１　（図 10）

ＳＢ３の南に位置する土坑。大きさは長径 1.4 m、短径 1 m、深さ 0.2 mを測る。黄褐色

の覆土の上面から弥生時代後期の羽状文をもつ壺や高杯の破片が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＫ２　（図 11）

長方形の土坑で、長径約 2.1 m、短径約 1 m、深さ約 0.1 mを測る。黄褐色土の覆土中より弥生土器が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＫ３　（図 11）

長径 3.6 m、短径 1.25 m、深さ約 0.2 mの土坑。西端は調査区外へ伸び、南側は近世以降の溝により削平されており、本来はもう一回り大きいと推測できる。覆土は上から暗褐色土、黄褐色の２層に分けることができる。主に下層より弥生時代中期後半とみられる土器片が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＸ５　（図 11、遺物図版４）

長径 2.6 m、短径 0.7 m、深さ 0.1 mの浅く不定形な土坑である。黄褐色土の覆土中より弥生土器の細片が多数出土しており、いずれも弥生時代中期後半から後期の特徴をもつ。

ＳＸ６　（図 10）

長径 3.8 m、短径 2.7 m、深さ約 0.5 mの土坑である。覆土は３層に分けることができ、上から灰黄褐色土、黄褐色土、黒色土に分けることができる。最下層より弥生時代後期の壺、高杯、台付甕の破片などが出土した。また、覆土中に炭の小破片が含まれていたが、周囲に焼土痕などは認められなかった。

ＳＸ８　（図 10、遺物図版４）

ＳＨ５と重なる位置にある遺構。形が不整形で長径 2.3 m、短径 1.1 m、深さ 0.1 mをはかる。出土遺物は弥生土器（28 ～ 30）である。頸部に沈線をめぐらす白岩式の特徴をもつ壺片（28）と、頸部に羽状文をめぐらす菊川式の特徴をもつ壺（29）が共伴しており、遺構の時期は弥生時代中期後半から後期と判断する。

ＳＸ９　（図 11、遺物図版４）

西端は近世の溝に切られている、長径 1.6 m、短径残存 0.9 m、深さ約 0.2 mの浅い土坑である。黄褐色土の覆土より弥生土器の壺片など（31 ～ 34）が出土している。

ＳＸ 10　（図 11、遺物図版４）

長径 2.9 m、短径 2.2 mを測る、浅い土坑である。覆土から弥生時代後期の壺（35）が出土している。

ＳＸ 11　（図 11・12、遺物図版１～３）

短径 2.7 m、長径 7.75 m、深さ 0.3 mの、東西に長い溝状の遺構である。南側は近現代の攪乱により失われており、西端は調査区外まで伸びる。底部中央はおおよそ平坦だが、東西の端に向かって浅くなっていく。覆土は大きく２層に分けることができ、下層の黒褐色土中に多数の弥生土器の破片が集中していた。土器はいずれも弥生時代中期後半の壺や高杯の破片で、地山より１～ 10㎝程度上の間で重なりあうように出土している。土器集中部に当該時期以降の混入などの影響も少ないことから一括性のある遺物として捉えることができる。接合した結果、口縁部から底部まで揃うものはほとんどなく、破片を廃棄した場所のようである。

土器集中地点付近にはＳＰ 863・865・868・869 がある。出土遺物はないが、層序と覆土より古代～中世のものと推測でき、四角状に配置されていることから小屋のような構造物

の可能性もある。また、西端のＳＰ 859 からはかわらけが出土しており、弥生時代と古代以降の大きく２時期の痕跡を確認できた。

出土遺物

１～５はＳＢ９の出土遺物である。１は台付甕で、体部から脚部の付け根までの残存高 16.2㎝、頸部径 5.4㎝である。外面はハケ調整、内面は板ナデ調整が施される。弥生時代中期の白岩式に該当する。２・３は壺で、２点とも頸部～体部にかけてのみ残存しており、丁子文を巡らす。５は甕の口縁部で、復元径は 30.5㎝である。浅鉢状の形態をしており、底部は確認できなかったものの台付甕と考えられる。

６から 23 はＳＸ 11 の出土遺物である。６～ 14・16 ～ 18・22・23 は壷の一部である。６は体部と底部は接合しないものの、胎土から同一個体である可能性が高い。残存高は 22.7㎝。頸部に櫛描直線文帯を施し、体部にハケ調整を施す。体部の最大径付近では一部に赤彩が残っている。７は長頸壺の頸部と底部片である。胎土は類似しているが、２点は接合せず別個体の可能性もある。底部径 6.9㎝、頸部残存高 10.5㎝、底部残存高 4.3㎝。頸部から体部にかけて斜格子文・無文帯・丁子文が施されている、瓜郷式の壺である。８・10 は壺の口縁部で、10 には円状の浮文がある。９・11 は広口壺の受口状口縁部である。９は口径 19.6㎝、11 は口径 23.9㎝に復元できた。11 の口縁部には横方向の沈線と縦方向の沈線による区画が施文される。12 は壺の体部の一部のみが残存しており、最大径は 38㎝に復元できた。縦方向に６方向の区画があると推測でき、その間に櫛による波状文を施している。さらにその下に山形文を巡らす。13 は壺の口縁部から頸部である。口径 13.4㎝、残存高 17.8㎝で、頸部には上から順に押圧文、全周する沈線、４方向にヘラ描きで縦の区画を入れ、その間にも沈線を巡らせる。弥生時代中期の嶺田式から白岩式古相に該当するか。14 は広口壺の受口状口縁部で、口径は 19.3㎝である。口縁部に山形文を巡らせる。16 は壺の頸部で、頸部径７㎝である。押圧文、弧文、斜め方向に沈線を施す。19・20 は高杯の脚部である。19 は接合部系 5.3㎝、底径 13.8㎝、残存高 8.5㎝である。接合部から底部の屈折部手前まで、縦方向に１条の線刻が施されている。一方向しか残存しておらず、配置等は不明である。22 は壺の底部で、底径６㎝である。23 は壺の体部～底部で、底径 4.6㎝、残存高 10㎝、最大径 20.5㎝に復元できる。摩滅が進み、調整は不明である。

24 ～ 27 はＳＸ５の出土遺物である。24 は壺の頸部のみ残存しており、頸部径は 8.4㎝である。刺突により羽状文が施文される。摩滅が激しく調整等は残っていない。26 は壺の口縁部で、口径 11.6㎝に復元でき、口縁端部は折り返して作られている。27 は壺の底部で、底径 7.5㎝である。

28 ～ 30 はＳＸ８より出土した。28 は壺の口縁部から頸部まで残存しており、口径 8.7㎝、頸部径 6.2㎝に復元できる。頸部に２本の沈線を巡らせる。29 は壺の体部のみ残存しており、最大径は 20.7㎝、残存高は 13.8㎝である。頸部との境に薄い帯状の粘土を貼り、その上に刺突により羽状文を施す。斜め、横方向のハケ調整と、最大径付近ではミガキ調整が残る。30 は台付甕の脚部で、底径 8.1㎝、接合部径 4.6㎝、残存高 8.8㎝である。外面ハケ調整、内面は体部側が板ナデ、底部側はハケ調整が残る。28・30 は弥生時代中期白岩式の新相の特徴をもち、29 は菊川式の特徴をもつ。

31 ～ 34 はＳＸ９の出土遺物である。31 は体部の一部のみ残存しており、ヘラ描きされ

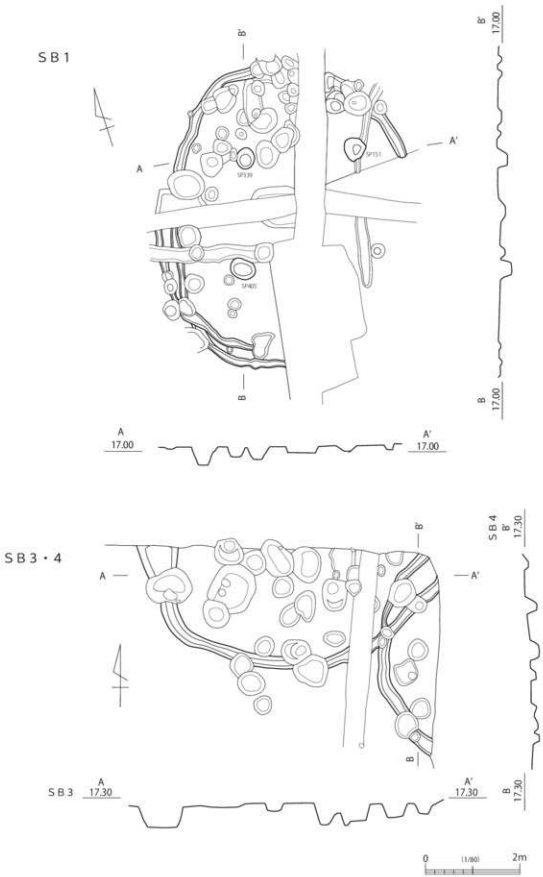


図7　SB1・3・4

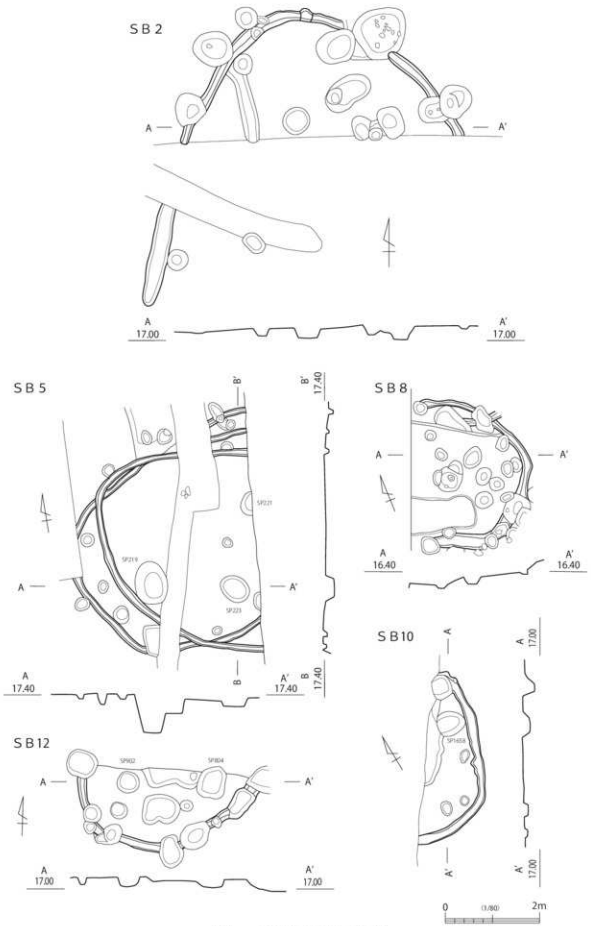


図8　SB2・5・8・10・12

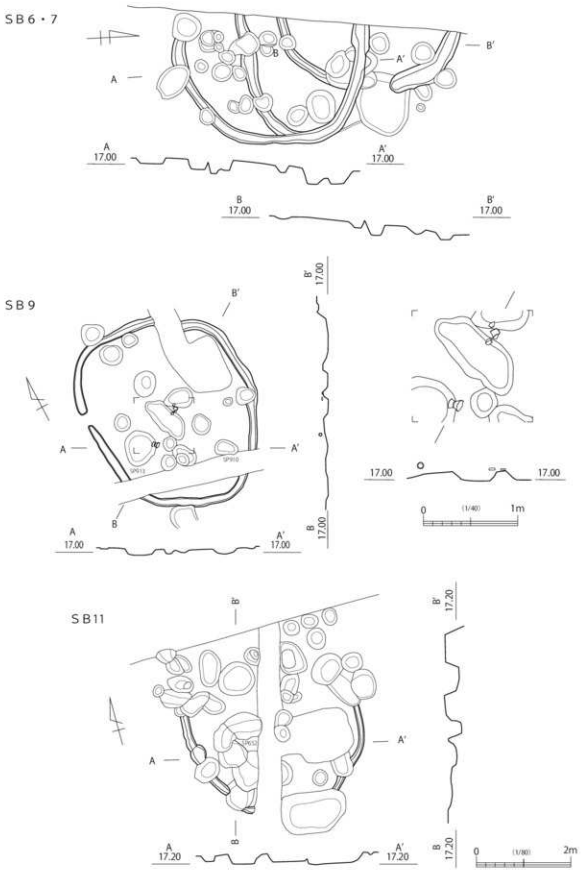


図9　SB6・7・9・11

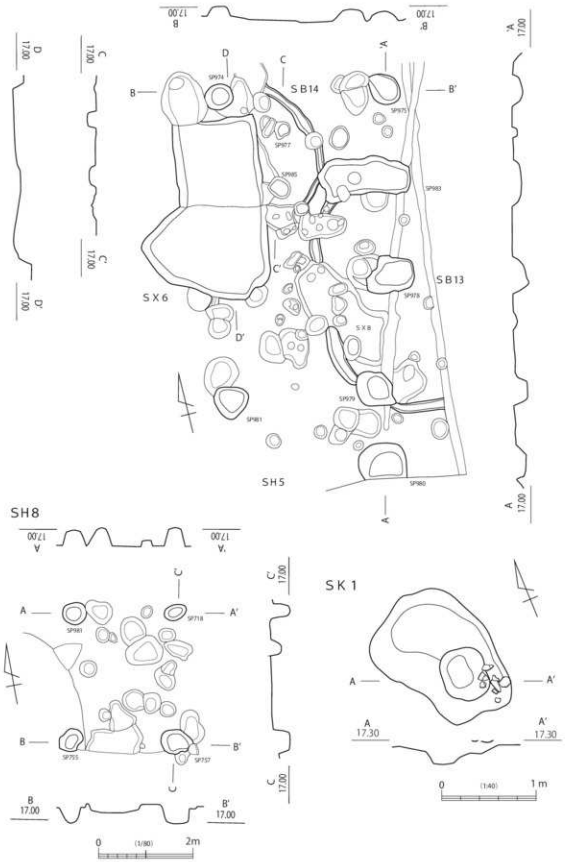


図10　SB13・14/SH5・8/SK1/SX6

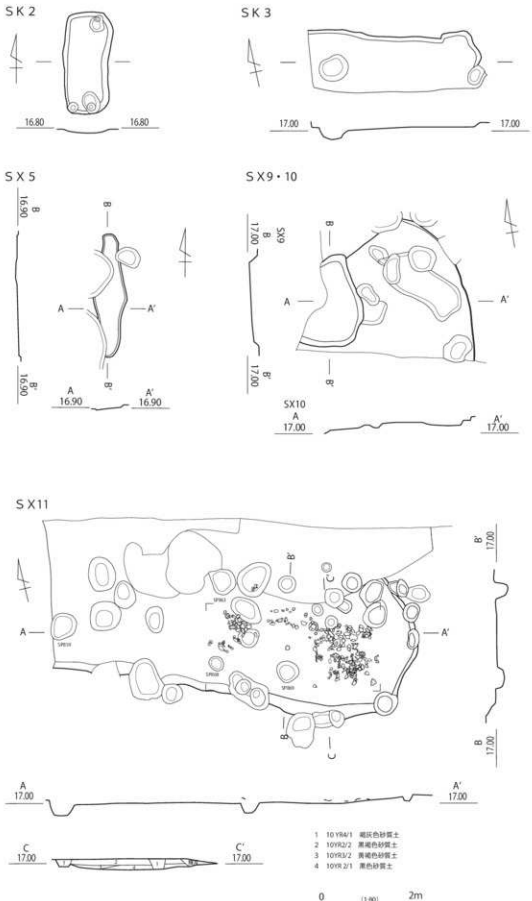


図11　SK2・3/SX5・9～11

ＳＸ11（土器出土状況）

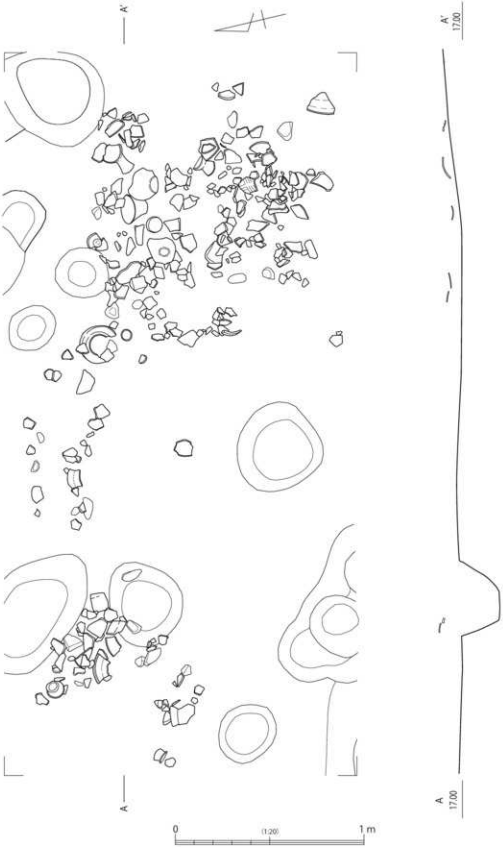


図 12　ＳＸ 11（土器出土状況）

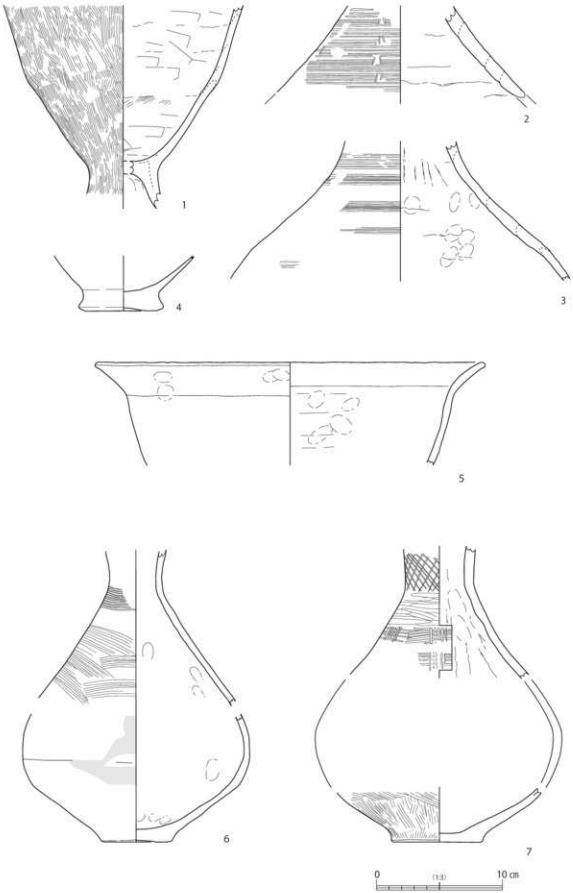


図 13　遺物図版 1

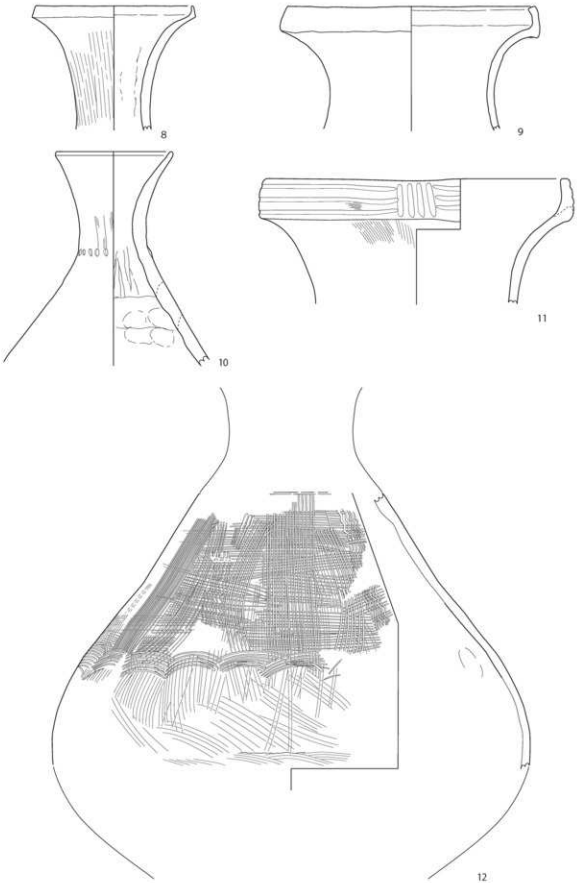


図 14　遺物図版 2

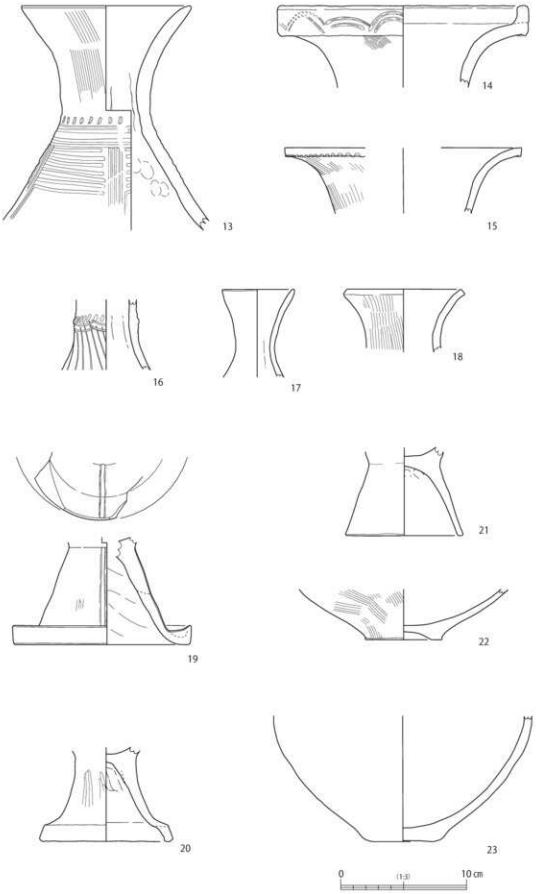


図 15　遺物図版 3

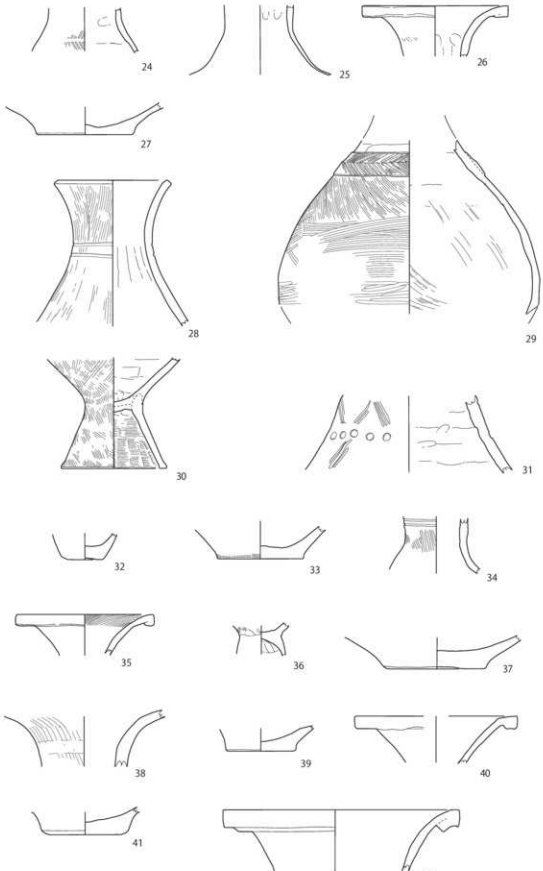


図 16　遺物図版 4

た山形文が２段、その間に押圧文がある。32 は底部のみで、底径が 3.3㎝と特に小型である。34 は壷の頸部で、頸部径 10.6㎝、残存高 6.1㎝である。頸部に沈線が２本以上施される。

35 は壺の口縁部で、口径 10.8㎝、残存高 4.2㎝である。口縁部は端部を折り返し、内面にハケ調整を施す。36・37 はＳＰ 19 より出土した。36 は高杯の接合部で、接合部径 3.2㎝と小型である。37 は壺の底部で、底径 7.8㎝である。38 は壺頸部で、頸部径 12.8㎝である。縦方向にハケ調整のあと、横方向にナデ調整を施す。39・41 は壺の底部で、39 は底径 5.7㎝、41 は底径 6.9㎝に復元できる。42 は壺の口縁部で、口径 17.8㎝である。38・39・41・42 はＳＰ 242 から出土している。

43・44 はＳＰ 1023 より出土した。43 は高杯の口縁部で、口径 26㎝、残存高 4.2㎝である。口縁部は屈折し外反、端部は折り返しており、刻み目を施す。44 は壺の体部で、頸部との境に帯状の粘土を貼り付け、段を作る。粘土上にヘラ描きによる斜線を巡らせる。

1-2. 古墳時代時代の遺構・遺物

ＳＨ１　（図 17）

梁間２間、桁行３間の建物で、一部攪乱を受け残存していないが総柱建物と考える。第 12 次調査ＳＢ１と重複していて、遺構主軸は N-13 度 - Ｅである。遺構規模は梁行 4.45 m、桁行５mを測る。柱間 1.3 ～ 1.7 m、柱穴径 0.5 ～ 1.1 m、深さ 0.25 ～ 0.5 mである。柱穴から土師器の小破片が出土したが図示できるものはない。

ＳＨ２　（図 17）

梁間２間、桁行２間の総柱建物か。遺構主軸は N-8 度 - Ｗで、規模は梁行 4.15 m、桁行 4.35 mを測る。柱間 1.7 ～ 2.0 m、柱穴径 0.55 ～ 0.95 m、深さ 0.3 ～ 0.36 mである。柱穴から土師器の小破片が出土したが図示できるものはない。

ＳＨ３　（図 18）

梁間２間、桁行２間の総柱建物か。ＳＢ１と重複している。遺構主軸は N-21 度 - Ｗで、規模は梁行 3.6 m、桁行 4.3 mを測る。柱間 1.36 ～ 1.76 m、柱穴径 0.64 ～ 0.7 m、深さ 0.25 ～ 0.4 mである。柱穴から土師器の小破片が出土したが図示できるものはない。

ＳＨ４　（図 18）

梁間１間、桁行１間の掘立柱建物で、遺構主軸は N-22 度 - Ｅである。規模は梁行 2.7 m、桁行 4.0 mを測る。柱間 2.2 ～ 3.7 m、柱穴径 0.5 ～ 1.1 m、深さ 0.25 ～ 0.5 mである。遺物は柱穴から土師器の小破片が出土したが図示できるものはなく、重複しているＳＨ２との明確な時期差は不明である。

ＳＨ５　（図 10）

梁間１間、桁行４間の建物。ＳＢ 13・14 と重複していて、遺構主軸は N-13 度 - Ｅである。遺構規模は梁行 4.1 m、桁行 8.77 mを測る。桁側の柱間 1.6 ～ 2.4 m、梁側の柱間 2.8 ～ 3.5 m、柱穴径 0.56 ～ 1 m、深さ 0.16 ～ 0.35 mである。遺物は、ＳＰ 980 から古墳時代後期の土師器高杯や壺口縁部が出土しているほか、弥生土器の細片が確認されている。

ＳＨ６　（図 19）

梁間１間、桁行２間の建物である。遺構主軸は N-23 度 - Ｅである。遺構規模は梁行 3.49 m、桁行 4.57 mを測る。柱間 1.75 ～ 3.2 m、柱穴径 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.24 ～ 0.56 mである。遺物は、柱穴から弥生土器、土師器、古墳時代後期の須恵器の破片が出土したが図示できる

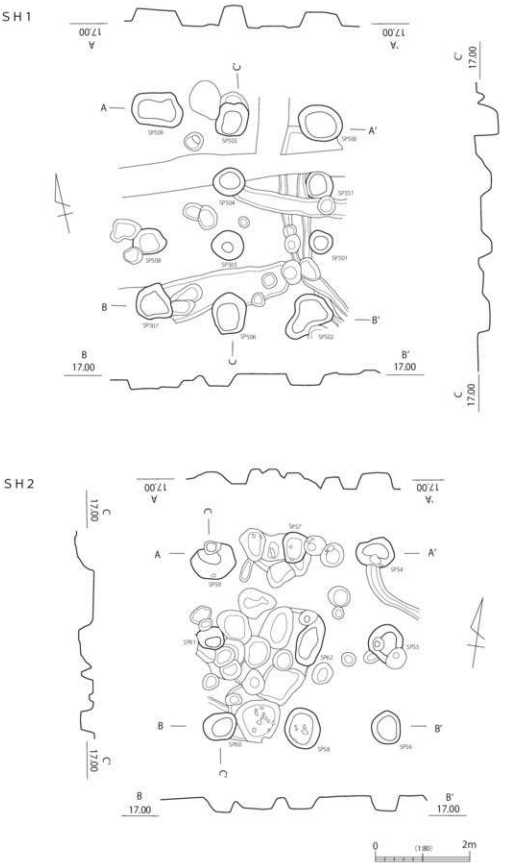

SH1
A
A'
B
B'
C
C'
17.00
SP509
SP503
SP500
SP504
SP511
SP508
SP502
SP501
SP507
SP506
SP502
SH2
SP517
SP514
SP519
SP513
SP515
SP512
SP502
SP518
SP516
0
(1:80)
2m

図17　ＳＨ１・２

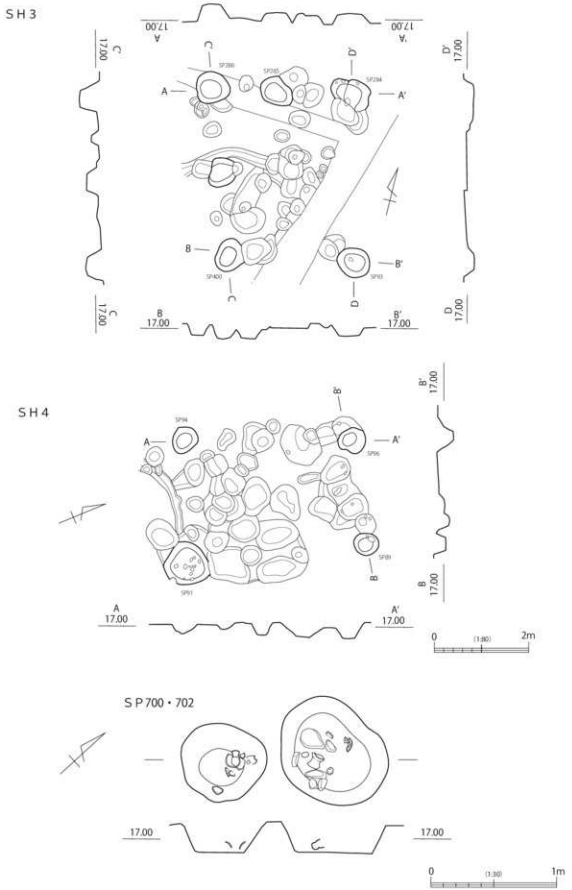


図18　SH3・4/SP700・701

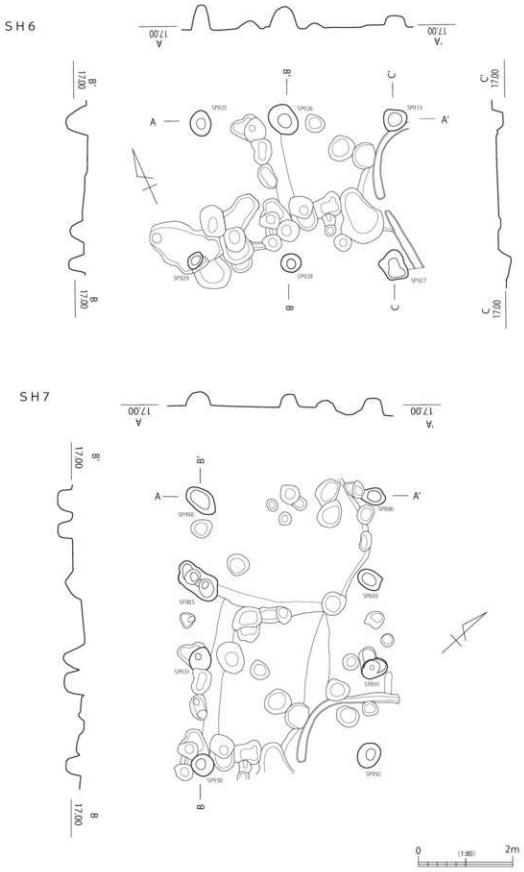

SH6
A
A'
17.00
B
B'
C
C'
SP925
SP926
SP913
SP929
SP928
SP927
SH7
SP955
SP956
SP883
SP885
SP917
SP919
SP950
SP952
0
(1:80)
2m

図19　SH6・7

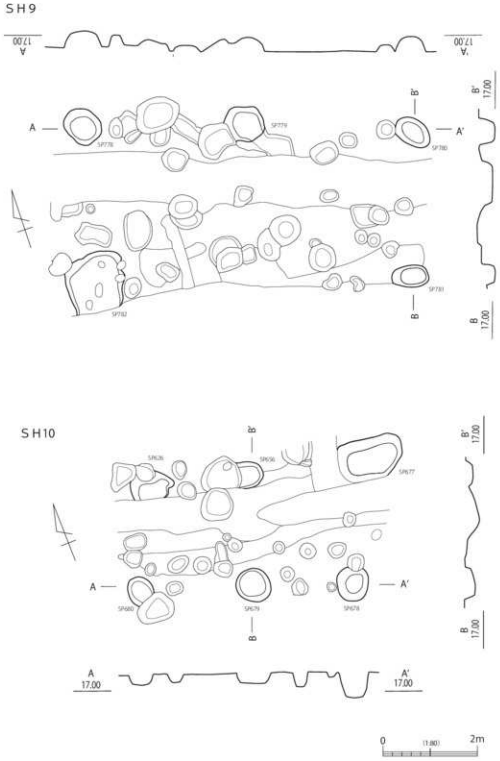

SH9
A
17.00
A'
17.00
SP778
SP779
SP780
SP781
SP782
B
17.00
B'
17.00
SH10
SP636
SP656
SP677
SP680
SP679
SP678
A
17.00
A'
17.00
0
(1:80)
2m

図20　SH9・10

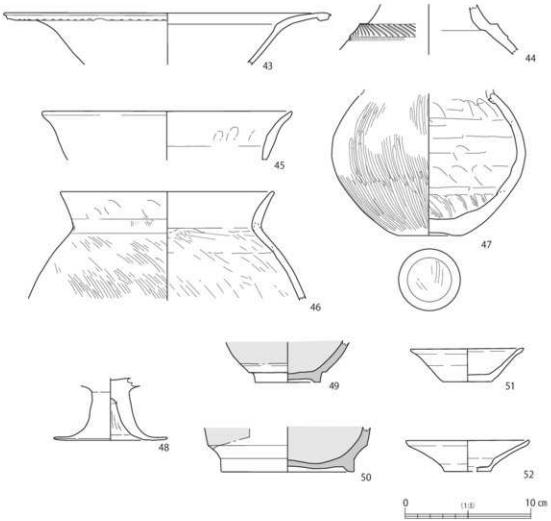


図 21　遺物図版 5

ものはない。

ＳＨ７　（図 19）

梁間 1 間、桁行 3 間の建物である。遺構主軸は N-45 度 - Wである。遺構規模は梁行 4.0 m、桁行 5.6 mを測る。桁側の柱間 1.8 ～ 2.2 m、梁側の柱間 3.6 ～ 3.7 m、柱穴径 0.55 ～ 0.88 m、深さ 0.4 ～ 0.55 mである。遺物は、柱穴から弥生土器と土師器の小破片が出土したが図示できるものはない。

ＳＨ９　（図 20）

梁間 1 間、桁行 2 間の建物である。遺構主軸は N-18 度 - Eである。遺構規模は梁行 4.5 m、桁行 7.8 mを測る。柱間 3.2 ～ 3.45 m、柱穴径 0.74 ～ 1.2 m、深さ 0.28 ～ 0.36 mである。柱穴から弥生土器、土師器、古墳時代後期の須恵器の破片が出土したが図示できるものはない。

ＳＨ 10　（図 20、遺物図版 5）

梁間 1 間、桁行 2 間の建物である。遺構主軸は N-18 度 - Eである。遺構規模は梁行 2.9 m、桁行 5.1 mを測る。柱間 2.5 ～ 3.2 m、柱穴径 0.65 ～ 1.75 m、深さ 0.15 ～ 0.65 mである。柱穴より土師器や弥生土器の壷や台付甕の破片が出土している。ＳＰ 656 から高杯脚部（48）

が出土している。

出土遺物（遺物図版５）

45・46は甕の口縁部である。45は口縁部のみ残存しており、ＳＰ190より出土した。口径は9.8㎝、残存高3.9㎝である。口縁部が長い傾向があり、古墳時代後期のものか。46は口縁部から体部の一部が残存しており、ＳＰ1048より出土した。口径は16.9㎝、残存高8.6㎝である。口縁端部が先細り、古墳時代前期のものか。47は第12次調査区の包含層中より出土した壷の体部で、最大径は15.4㎝、底径4.9㎝である。外面と底部の内面はミガキ調整が施される。口縁部が欠損しており全体形は不明だが、古墳時代前期のものか。48は高杯脚部で、ＳＨ10の柱穴であるＳＰ656より出土した。底径９㎝、接合部径３㎝、残存高５㎝である。裾広がりの形態から、古墳時代後期のものと推測する。

1-3. 奈良時代以降の遺構・遺物

出土遺物（遺物図版５）

49・50は陶器である。49はＳＰ943から出土した椀の底部で、高台径5.2㎝を測る。外面の底部を除く、体部から内面にかけて灰黄褐色の釉薬がかかる。50はＳＰ825から出土した椀の底部で、高台径10.6㎝を測る。外面体部から内面にかけて灰褐色の釉薬がかかる。51・52はかわらけで、ＳＰ859より出土した。51は口径９㎝、器高2.6㎝である。52は口径9.8㎝、器高2.5㎝である。ともに底部には糸切痕が残る。

3節　第13次調査

第13次調査区は大門遺跡の南端に位置し、面積は985㎡である。基本層序は概ね以下のとおりである。

Ⅰ層　砂利層　客土
Ⅱ層　黄褐色土　表土
Ⅲ層　褐色土
Ⅳ層　黒褐色土　遺物包含層
Ⅴ層　明黄褐色土（円礫を含む）　地山　遺構確認面

Ⅴ層にて遺構を確認するまでに、表土を50～70㎝除去した。遺構確認面の標高は14.5～15.0ｍで、南に向かって緩やかに傾斜している。遺構確認面は円礫を多量に含んでいる。大門遺跡では粘土層を遺構面とする地点と、礫層を遺構面とする地点があり、遺跡南端部や西端部にて礫層の傾向がある。また、南端部では南に向かう地山の落ち込みを確認できた。

第13次調査区の南西部と北東部は攪乱を受けていて、遺構や出土遺物はほぼ確認できていない。南北および東西方向に近世以降の溝が通る。竪穴住居と推測される竪穴状の遺構と、掘立柱建物10棟を確認した。

1-1. 弥生時代の遺構・遺物

ＳＨ14　（図23）

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-7度-Wである。遺構規模は梁行4.2ｍ、桁行4.2ｍを測る。柱間3.2～3.8ｍ、柱穴径0.48～0.8ｍ、深さ0.15～0.25ｍである。ＳＨ14の中央部に近世の溝が通っていて、南西の柱穴は確認できなかった。柱穴から弥生土器が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＨ19　（図23）

梁間1間、桁行1間の建物で、遺構主軸はN-13度-Wである。遺構規模は梁行4.2ｍ、桁行4.3ｍを測る。柱間3.2～3.6ｍ、柱穴径0.5～0.85ｍ、深さ0.15～0.30ｍである。柱穴より弥生土器の細片が出土しているが、図示できるものはなく、時期特定も難しい。

ＳＫ5（図23、遺物図版6）

長径1.3ｍ、短径1ｍの土坑である。深さは0.2ｍで、東に向かってだんだん浅くなり、遺構下端が不明瞭になる。灰黄褐色の覆土内より、弥生時代後期の菊川式の壺（53・54）が出土した。

ＳＫ6　（図24、遺物図版6）

長径2.4ｍ、短径0.9ｍ、深さ0.21ｍの土坑である。調査区の西端に位置する土坑で、土坑の西端は調査区外へと続いている。灰黄褐色の覆土より弥生土器の壺の破片（55）が出土した。

出土遺物

53～54はＳＫ5より出土した。53は壺の体部から底部が残存していて、底径8㎝、残存高18.2㎝である。体部の口縁部側は縄文で施文し、底部側はミガキ調整が残る。54は壺の口縁～頸部である。口径15.8㎝、頸径6.1㎝、残存高は11.8㎝である。口縁端部は折り返

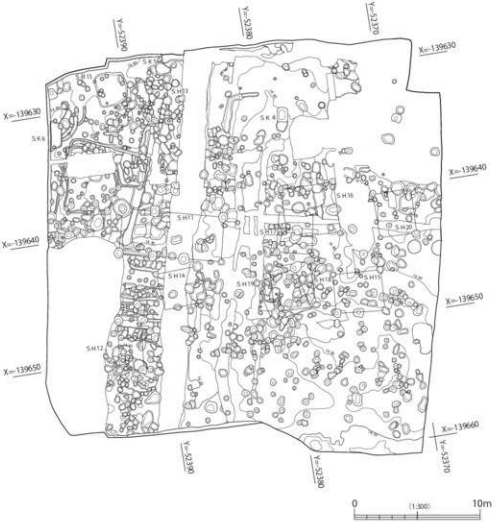


図 22　第 13 次調査区全体図

して、棒状浮文 3 個を 6 方向に配置する。頸部には沈線と丸状の浮文を施す。時期は弥生時代後期で、菊川式の特徴をもつ。

56 はＳＰ 1181 からは出土した。弥生時代後期のものと推測される、小型壺の口縁部～頸部である。口径 9.0㎝、頸径 5.2㎝、残存高は 8.5㎝である。頸部に施文はない。ＳＰ 407 から出土した 57 の壺は、口縁部～体部まで残存している。ＳＰ 1475 から出土した。口径 14.4㎝、頸部径 8.8㎝、残存高 14.7㎝である。口縁端部は折り返していて、頸部や体部にハケ調整がみられる。

58 は平面精査で、59・60 は撹乱から出土した。58 は小型壺の体部～底部である。底径 5.4㎝、残存高 7.7㎝を測る。肩部に刺突文を巡らせる。59・60 は高杯の脚部である。59 の接合部径は 5 ㎝で、羽状文を巡らす。60 の接合部径は 6 ㎝である。

1-2. 古墳時代時代の遺構・遺物

ＳＨ 11（図 25）

梁間 1 間、桁行 3 間の建物で、遺構主軸は N-15 度 - E である。遺構規模は梁行 4.7 m、

桁行 8.8 mを測る。柱間は梁方向が 3.5 m、桁方向が 2.4 ～ 2.8 m、柱穴径 0.48 ～ 1.4 m、柱穴の深さ 0.2 ～ 0.728 mである。ＳＰ 1318 からは須恵器杯蓋の破片が出土しており、6 世紀後半のものと考えられる。ほか、土師器の破片や菊川式の弥生土器片が確認されている。

ＳＨ 12（図 25）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N-10 度 - Wである。遺構規模は梁行 2.32 m、桁行 4.53 mを測る。柱間 1.84 ～ 3.9 m、柱穴径 0.53 ～ 0.86 m、深さ 0.33 ～ 0.56 mである。柱穴より土師器片が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＨ 15（図 26）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N- 6 度 -W である。遺構規模は梁行 3.6 m、桁行 4.4 mを測る。柱間 2.96 ～ 4 m、柱穴径 0.44 ～ 0.64 m、深さ 0.24 ～ 0.4 mである。柱穴より弥生土器片や土師器片が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＨ 16（図 26）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N- 1 度 - Wである。遺構規模は梁行 4.5 m、桁行 4.6 mを測る。柱間 3.8 ～ 4.0 m、柱穴径 0.38 ～ 1.04 m、深さ 0.32 ～ 0.4 mである。出土遺物はなく時期は特定できないが、周囲の建物の時期から古墳時代以降と推測される。

ＳＨ 17（図 26）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N-12 度 - E である。遺構規模は梁行 3.1 m、桁行 3.92 mを測る。柱間 2.4 ～ 3.2 m、柱穴径 0.32 ～ 0.74 m、深さ 0.16 ～ 0.3 mである。出土遺物はなく時期は特定できないが、周囲の建物の時期から古墳時代以降と推測される。

ＳＨ 20（図 27）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N- 1 度 -W である。遺構規模は梁行 3.3 m、桁行 4.3 mを測る。柱間 2.8 ～ 3.4 m、柱穴径 0.38 ～ 0.64 m、深さ 0.2 ～ 0.64 mである。出土遺物はなく時期は特定できないが、周囲の建物の時期から古墳時代以降と推測される。

出土遺物（遺物図版 7）

61 は土師器の高杯で、ＳＰ 1927 より出土した。口径 13.1㎝、底径 8 ㎝、器高 8.3㎝である。外内面ともに指ナデ調整により成形されている。62 は包含層から出土しており、底部を欠くが、椀の一部と考えられる。口径 15.2㎝、残存高 10.8㎝である。摩滅が激しく、調整等は残存していない。6 世紀から 7 世紀のものと推測される。63 はＳＰ 1535 より出土した、土師器杯身である。口径 12㎝、器高 4.2㎝である。焼きが甘く摩滅が激しいため、調整等は残存していない。形態より須恵器を模倣したものと推測される。時期は古墳時代後期である。

1-3. 奈良時代以降の遺構・遺物

ＳＢ 15（図 25、遺物図版 7）

平面形はほぼ正方形で、長軸 2.6 m、短軸 2.45 mを測る。深さ約 0.2 mの落ち込みで、壁溝や炉跡は検出できなかった。ＳＰ 1099・1105・1107・1108 が柱穴に該当するか。覆土は上から黒褐色土、暗褐色土の 2 層に分けることができ、そのうちの下層から土師器の甕口縁部や須恵器片が出土している。

ＳＨ 13（図 27、遺物図版 7）

梁間 1 間、桁行 2 間の建物で、遺構主軸は N- 5 度 - E である。遺構規模は梁行 3.5 m、桁

行 3.92 mを測る。柱間 2 ～ 2.8 m、柱穴径 0.54 ～ 0.72 m、深さ 0.16 ～ 0.32 mである。ＳＰ 1110 から灰釉陶器片が出土している。

ＳＨ 18（図 28）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N- 2 度 - Wである。遺構規模は梁行 4 m、桁行 4.1 mを測る。柱間 3.2 ～ 3.6 m、柱穴径 0.6 ～ 0.76 m、深さ 0.18 ～ 0.24 mである。ＳＰ 1799 より弥生土器片とかわらけが出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。かわらけの出土から中世の建物跡と推測する。

ＳＫ４（図 28）

長径 1.4 m、短径 1.1 mの土坑。覆土内より弥生土器の細片と銅銭が出土した。銅銭は錆による癒着により、大きく 2 点に分かれる。1 点目はほぼ完形の 4 枚が縦に重なった状態で癒着し、錆により文字等を読み取ることはできない。2 点目は 1 / 4 以下の残存率の 2 枚が重なっており、中央の孔の外側に文字があることはわかるが読み取れない。銅銭計 6 枚をもつ江戸時時代の土壙墓と推測する。弥生土器の細片は、周辺からの流れ込みと考えられる。

ＳＡ１（図 28）

ＳＡ１～４はいずれも第 13 次調査区の東南部で確認された中世の柵である。周囲と比較して深い柱穴が東西方向に等間隔に並ぶが、南北方向の関係性が見えなかったため柵の可能性が高いと判断した。第 13 次調査区は遺跡南端にあたることから、境界としての用途も想定される。ＳＡ１は 4 つの柱穴が約 1.8 m間隔で並び、全長 8 mを測る。柱穴径 0.46 ～ 0.48 m、柱穴の深さは 0.28 ～ 0.44 mである。ＳＰ 1961 からは弥生土器や土師器の細片が出土しているのみで、他の遺物はない。ＳＡ１～４が近接した時期の物と考えられることから、これらの土器片は流れ込みと推測している。

ＳＡ２（図 28）

5 つの柱穴が約 1.6 m間隔で並んでおり、全長 8.2 mを測る。柱穴径 0.4 ～ 0.77 m、柱穴の深さ 0.24 ～ 0.46 mである。ＳＰ 2019 から土師器の細片のほか、陶器の破片 1 点が確認されている。

ＳＡ３（図 28）

4 つの柱穴が約 2.5 m間隔で並んでおり、全長 8.3 mを測る。柱穴径 0.4 ～ 0.52 m、柱穴の深さ 0.28 ～ 0.52 mである。遺物はＳＰ 2024 から須恵器の細片が、ＳＰ 2025 から土師器の破片が出土したのみで、図示できるものはない。

ＳＡ４（図 28）

約 2 ～ 3.5 m間隔で 5 つの柱穴が並び、全長 11.6 mを測る。柱穴径 0.36 ～ 0.74 m、柱穴の深さ 0.2 ～ 0.4 mである。出土遺物はＳＰ 2050 より土師器の細片が出土したのみで図示できるものはない。

出土遺物（遺構図版７）

64・65 はＳＢ 15 より出土した。65 は土師器甕の口縁部で、残存率が低く口径は復元できなかった。口縁部は内湾し、体部に板ナデ調整が施される。奈良時代前期のものか。66 は灰釉陶器の底部である。ＳＨ 13 の柱穴であるＳＰ 1110 より出土した。高台径 7 ㎝で、外面は回転ヘラ削りと回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整を行う。内面内側に自然釉が斑点状に付着している。高台は低く、平安時代前期のものか。67 は陶器の蓋で、ＳＰ 1718 よ

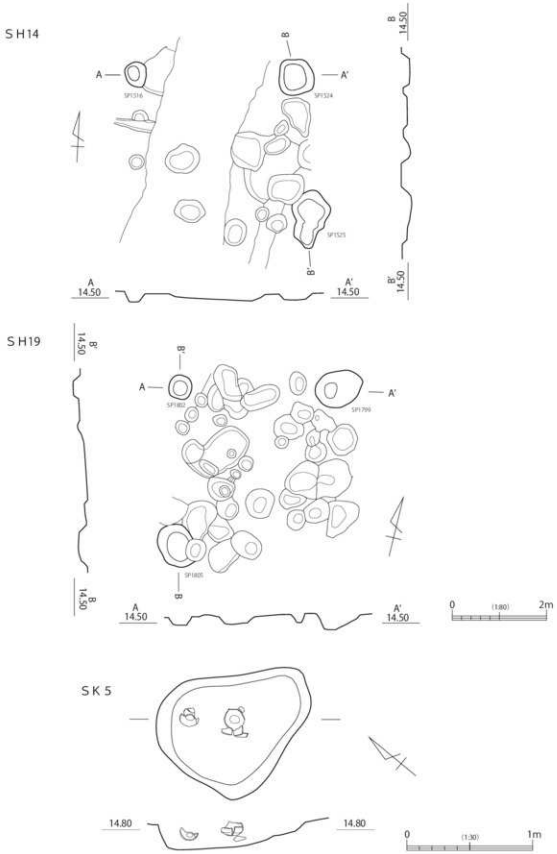


図23　SH14・19/SK5

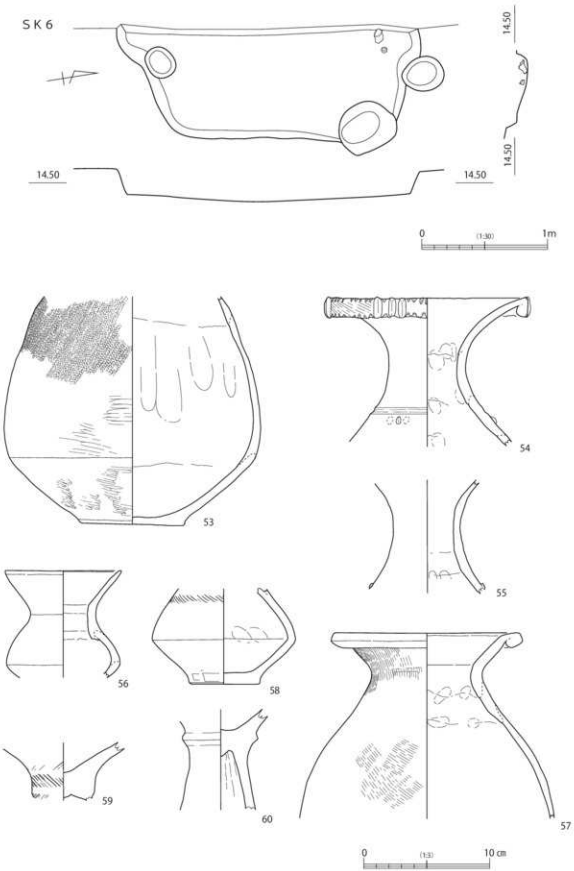


図 24　SK6/遺物図版6

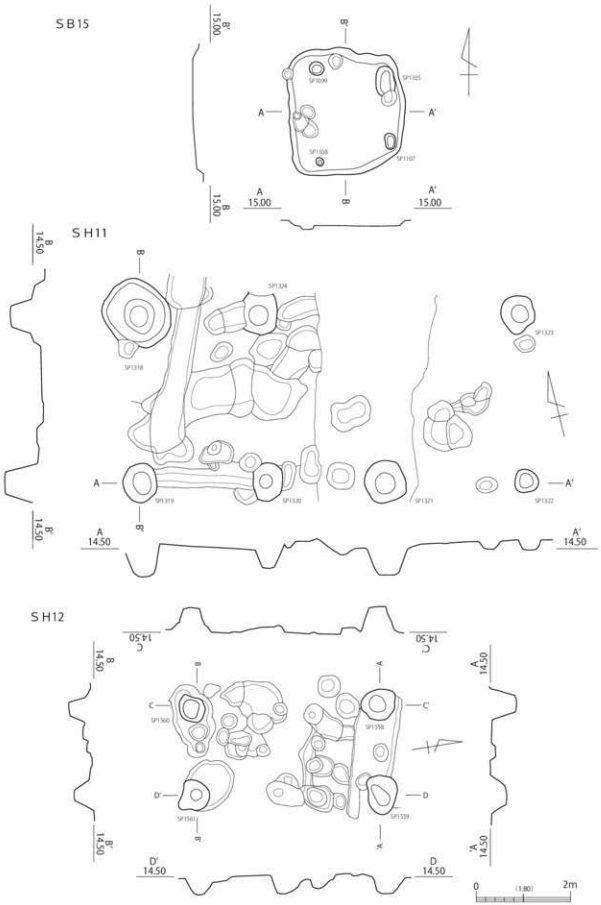


図25　SH11・12/SB15

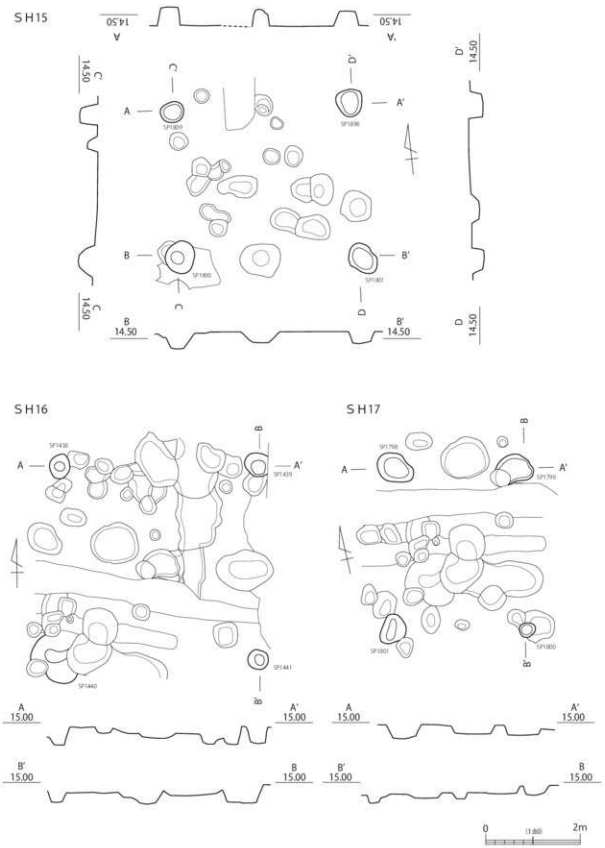


図26　SH 15～17

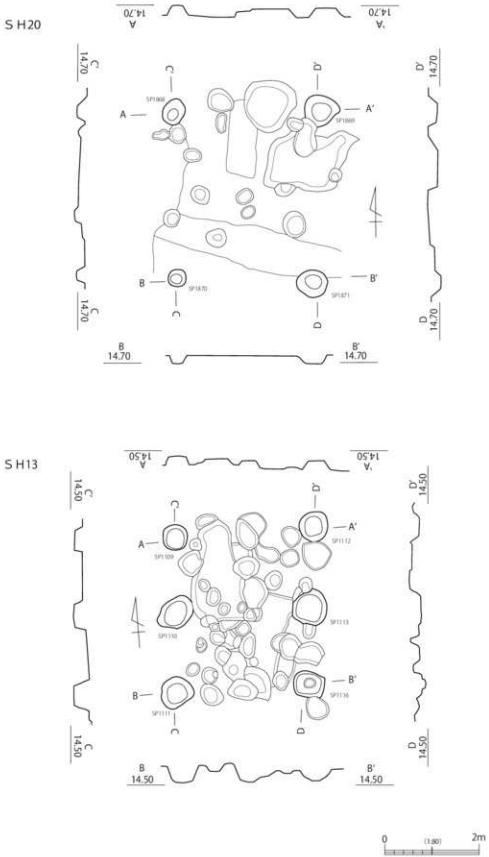

SH13
A
14.50
A'
14.50
C
14.50
C'
14.50
D'
14.50
D
14.50
B
14.50
B'
14.50
SP1109
SP1112
SP1113
SP1136
SP1134
SP1111
SH20
A
14.70
A'
14.70
C
14.70
C'
14.70
D'
14.70
D
14.70
B
14.70
B'
14.70
SP1868
SP1869
SP1870
SP1871
0
(3.80)
2m

図27　SH20・13

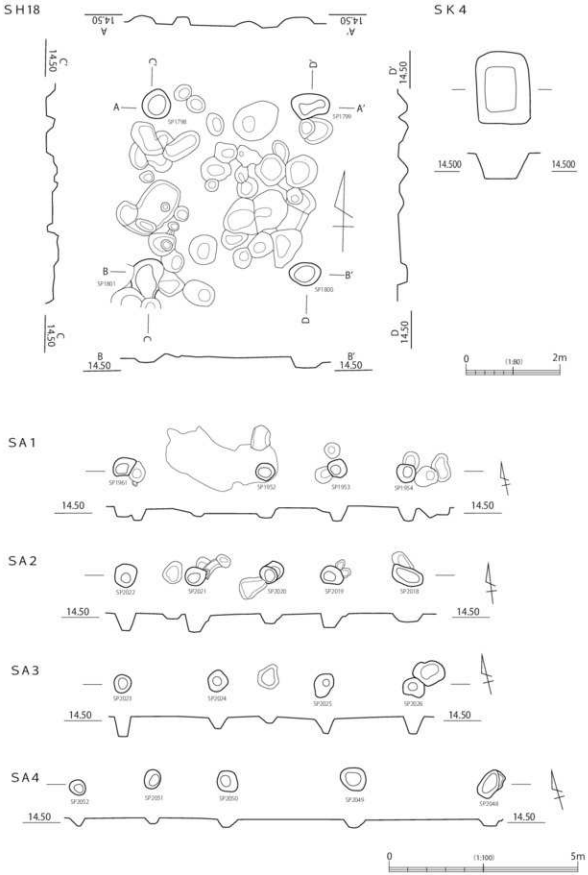


図28　SH18/SK4/SA1～4

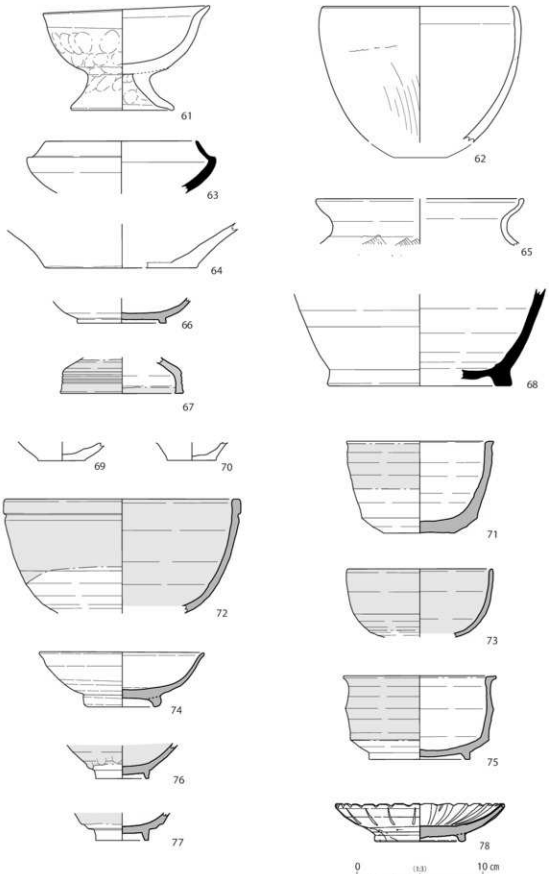


図 29　遺物図版 7

り出土した。口径 9.8㎝を測り、天頂部を除く外面および内面の口縁部まで暗褐色の釉薬がかかる。68 は壺の底部で、ＳＰ 1415 より出土した。高台径 14.6㎝で、外面に自然釉薬が付着する。

69・70 はかわらけで、いずれもＳＰ 1707 より出土した。69 は底径 3.8㎝、残存高 1.4㎝を測り、底部は糸切痕が残る。70 は底径 4 ㎝、残存高 1.3㎝を測る。内外面ともにナデ調整により成形され、底部は糸切痕が残る。

71 以降は攪乱もしくは包含層より出土したものである。74 は灰釉陶器の椀で、口径 13㎝、高台径 5.4㎝、器高 4.4㎝である。高台は低三日月形を呈する。10 世紀後半ごろか。71 ～ 73・75 は陶器か。76・77 は山茶碗の底部である。76 は高台径 4.2㎝、77 も高台径 4.2㎝である。内面および外面外部に、灰～オリーブ黄色の釉薬がかかる。78 は陶器の皿で、口径 13.2㎝、高台径 7 ㎝、器高 3 ㎝を測る。皿の縁を花形に成形し、外内面に中央に向かって放射状の沈線を入れる。

4 節　第 14 次調査

第 14 次調査区は第 13 次調査区の北東に位置し、面積は 241㎡である。基本層序は概ね以下のとおりである。

Ⅰ層　砂利層　客土

Ⅱ層　青灰色　客土

Ⅲ層　黒褐色土　遺物包含層

Ⅳ層　明黄褐色土（円礫を含む）　地山　遺構確認面

Ⅳ層にて遺構を確認するまでに、表土を 0.6 ～ 1 m除去した。遺構確認面の標高は 15.4 ～ 15.7 mで、南に向かって緩やかに傾斜している。第 14 次調査区では多数のピットを確認でき、そのうち位置や深さなどから掘立柱建物の柱穴と推測されるものを選別したが、見落としている可能性がある。

1-1. 弥生時代の遺構・遺物

ＳＨ 21（図 31）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N- 9 度 - E である。遺構規模は梁行 3.1 m、桁行 3.3 mを測る。柱間 2.3 ～ 2.9 m、柱穴径 0.39 ～ 0.62 m、深さ 0.24 ～ 0.33 mである。中央部分は近世以降の溝により削平されている。柱穴から弥生土器の細片が出土したが、図示できるものはない。

ＳＨ 22（図 31）

梁間 1 間、桁行 1 間の建物で、遺構主軸は N-18 度 - E である。遺構規模は梁行 3.1 m、桁行 4.4 mを測る。柱間 2 ～ 3.6 m、柱穴径 0.55 ～ 0.63 m、深さ 0.19 ～ 0.28 mである。中央部分は近世以降の溝により削平されている。柱穴から弥生時代後期の高杯脚部を含む、弥生土器の細片が出土したが、図示できるものはない。

ＳＨ 23（図 31）

梁間１間、桁行１間の建物で、遺構主軸はN- １度 - Ｅである。遺構規模は梁行3.2 m、桁行3.9 mを測る。柱間 2.7 ～ 3.12 m、柱穴径 0.36 ～ 0.55 m、深さ 0.25 ～ 0.3 mである。中央やや西よりの位置で厚さ４㎝の焼土が確認でき、ＳＨ 23 に伴う炉跡の可能性がある。焼土はＳＫ９によって切られていた。柱穴から弥生土器の細片が出土したが、図示できるものはない。

ＳＨ 24（図 32）

梁間１間、桁行１間の建物で、遺構主軸はN-14 度 - Ｅである。遺構規模は梁行 2.5 m、桁行 3.68 mを測る。柱間 2.4 ～ 3.5 m、柱穴径 0.36 ～ 0.55 m、深さ 0.25 ～ 0.3 mである。柱穴から弥生土器が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＨ 25（図 32）

梁間１間、桁行１間の建物で、遺構主軸はN-14 度 - Ｅである。遺構規模は梁行 2.6 m、桁行 3.3 mを測る。柱間２～ 2.8 m、柱穴径 0.36 ～ 0.77 m、深さ 0.24 ～ 0.28 mである。柱穴から弥生土器が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＨ 26（図 32）

梁間１間、桁行１間の建物で、遺構主軸はN-11 度 - Ｗである。遺構規模は梁行 2.8 m、桁行 3.48 mを測る。柱間２～ 2.8 m、柱穴径 0.46 ～ 0.68 m、深さ 0.16 ～ 0.3 mである。柱穴から弥生土器が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＨ 27（図 33）

梁間１間、桁行１間の建物で、遺構主軸はN- ２度 - Ｅである。遺構規模は梁行 2.4 m、桁行 3.7 mを測る。柱間２～ 2.6 m、柱穴径 0.56 ～ 0.8 m、深さ 0.32 ～ 0.45 mである。ＳＰ 2467 からは、弥生時代中期の嶺田式の壺や白岩式の破片が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＨ 28（図 33）

梁間１間、桁行１間の建物で、遺構主軸はN- ９度 - Ｅである。遺構規模は梁行 2.5 m、桁行 3.6 mを測る。柱間２～ 3.2 m、柱穴径 0.33 ～ 0.4 m、深さ 0.4 mである。柱穴から弥生土器が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。中央のＳＰ 2445 にて焼土を確認しており、ＳＨ 28 に伴う炉跡の可能性がある。ＳＰ 2445 は径約 40㎝、深さ約６㎝の浅いピットで、その壁から底部にかけて広く被熱していた。ＳＰ 2445 の覆土から焼土のブロックや弥生土器の破片が出土しているが、いずれも細片である。

ＳＨ 29（図 34）

梁間１間、桁行１間の建物で、遺構主軸はN-13 度 - Ｅである。遺構規模は梁行 3.52 m、桁行 3.9 mを測る。柱間 3.2 ～ 3.5 m、柱穴径 0.4 ～ 0.68 m、深さ 0.16 ～ 0.28 mである。柱穴から弥生土器が出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

ＳＤ 23（遺物図版７）

調査区の南端部に位置し、弧を描く形の溝である。幅 0.54 m、深さ約 0.2 mである。遺構は調査区外へ伸びると推測されたが、その後の調査にて隣接部から続きを検出できなかったことから、全体形や用途は不明である。覆土は上から３層に分けることができ、暗褐色土、黒褐色土、黒褐色土に分かれる。そのうち最下層より弥生時代後期の土器片が出土した。

ＳＸ 14（図 34、遺物図版７）

長径 1.1 m、短径約１m、深さ 0.16 mの浅い不整形な遺構である。覆土は黒褐色土遺構

の底面付近にて、0.4 × 0.6 mの範囲に土器片が広がった状態を確認した。出土遺物は弥生時代中期の壺や台付甕であったが、いずれも一部のみで復元できるものはない。

ＳＰ 2497（図 34）

径 0.35 m、深さ 0.24 mのピットである。黄褐色土の覆土中の、底面より約 0.15 m上にて弥生土器片が重なるように入っていた。土器は破片ばかりで接合せず、流れ込みの可能性がある。

出土遺物

79･80 はＳＫ７より出土した。79 は壺の口縁部で、口径 3.8㎝、残存高 4.9㎝と小型である。頸部に縦方向のミガキ調整をして、その下に刺突文を２重に巡らせる。刺突文と重なるように２本のヘラ描きがあるが、下部が欠損しており文様帯は不明である。80 は高杯の接合部である。接合部径 4.4㎝、残存高 7.3㎝で、接合部に突帯を巡らせる。

81 は高杯の脚部で、ＳＤ 23 より出土した。底径 9.8㎝、残存高 4.4㎝である。底部を屈折させており、弥生時代後期のものか。

83・84 はＳＤ 26 より出土している。83 は壺の体部のみ残存していて、最大径 16㎝、残存高 9.7㎝に復元できた。頸部が細く、体部は下膨れの形態である。文様は丁字文、斜格子文、沈線の組み合わせで、中期後葉の白岩式のものか。84 は壺の頸部のみ残存しており、頸部径 6.4㎝である。頸部に横方向の沈線を巡らせ、その下にヘラ描きで羽状文を巡らせる。

85は壺で、ＳＰ 2139から出土した。頸部のみ残存していて、頸部径7.4㎝、器高8.9㎝である。刺突により横方向の沈線と羽状文を施しており、弥生時代後期の菊川式の新相にあたる。86 は甕の口縁部～体部で、ＳＰ 2234 から出土した。口径 14.6㎝、残存高 12.5㎝である。87 は壺の口縁部である。ＳＰ 2374 から出土し、口径 15.6㎝を測る。口縁部は横方向に伸び、内面に縄文を施す。その下に縄文原体を横方向に押し当てて山形を作り、横方向のラインをいれる。さらに縦方向にも間隔をあけて縄文を押し当てている。

88 から 91 はＳＸ 14 から出土したものである。88 は壺の頸部で、頸部径 5.4㎝、残存高 12.4㎝である。横方向に爪形沈線を 10 本以上を巡らせる。口縁部側の３本は区画なく連続していて、それ以下の７本は施文しない空白帯を設けている。空白帯は縦方向に揃えていて、下方ほど空白帯が広くなる。残存率が低く、空白帯の配置は不明である。時期は弥生時代中期の嶺田式か。89 は壺の頸部から体部で、頸部径 4.5㎝である。体部には丁字文が施されている。丁字文は２個単位で４方向に配置されると推測できる。90 は台付甕の体部で、残存高 12.7㎝である。細身で胴部に張り出しのある形態で、外面ハケ調整が施される。91 は台付甕の口縁部～体部で、口径 18㎝、残存高 12.4㎝に復元できる。外面はハケ調整で、口縁端部に刻み目を施す。

92 は台付甕の体部から脚部の一部で、最大径 23.6㎝、残存高 12.3㎝である。撹乱の覆土内より出土している。93 も台付甕の脚部か。底径 9㎝、残存高 7.3㎝である。94 は壺の底部と推測されるが、底径 3.2㎝と小型である。

1-2. 古墳時代時代の遺構・遺物

出土遺物

95 は小型鉢か。口縁部から底部まで残存しており、口径 8.4㎝、器高 3.7㎝である。96・97 も土師器の小型鉢か。96 は口縁部で屈折し外側へ広がり、口径は 13.8㎝を測る。97 は口縁部が広がらず、最大径が胴部にある。残存率が低く、正確な口径は測りだせない。いずれも古墳時代後期のものである。

1-3. 奈良時代以降の遺構・遺物

出土遺物

98 は土師器の台付椀の底部か。高台はハの字に広がり高台径 7 ㎝を測る。奈良時代前期のものと推測する。99 は灰釉陶器の小型壺か。底部はヘラ削り、外内面は回転ナデ調整が施される。100 は須恵器の杯身か。平底で底径 10.8㎝を測り、底面はヘラ削りを行う。101 は須恵器の蓋で、小破片のため口径は復元できない。摘みの有無は不明である。102 は須恵器の蓋で、口径 15.6㎝を測る。103 は灰釉陶器の壺で、底径 6.4㎝、残存高 6.2㎝である。体部中央に最大径があり、口縁部にむかってすぼむ。平安時代前期のものか。104 の椀は口径 13.4㎝、高台径 7.2㎝、器高 4.2㎝である。底部はヘラ削り調整が残る。105 は陶器の底部のみが残存している。高台径は 8.2㎝で、短い三角形である。106 は陶器の底部で、高台径 8.2㎝を測る。体部の外内面ともに黄褐色の釉薬がかかる。107・108 も陶器の底部で、107 は高台径 6.0㎝。108 は高台径 6.4㎝を測る。高台は短い三角形をしている。

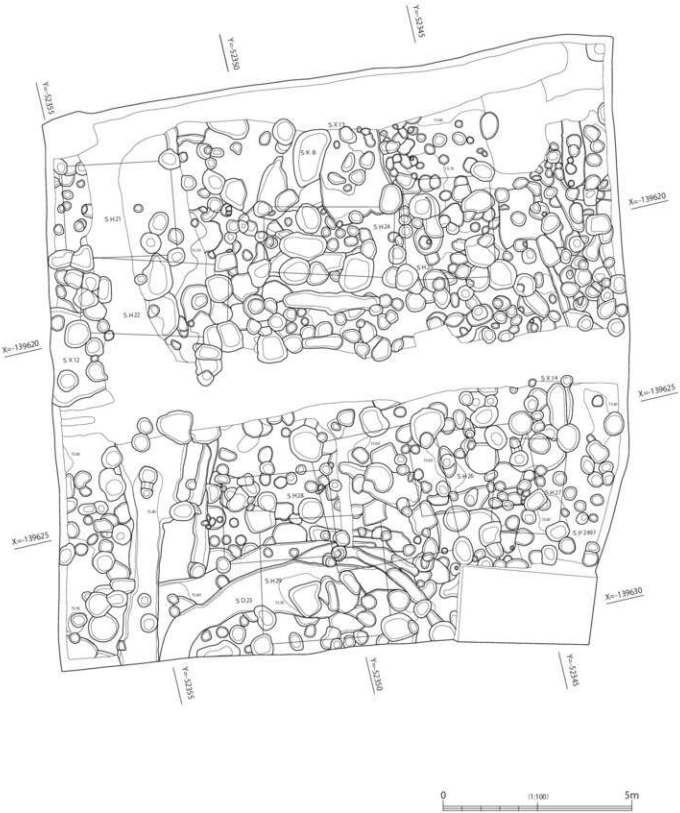


図 30　第 14 次調査区全体図

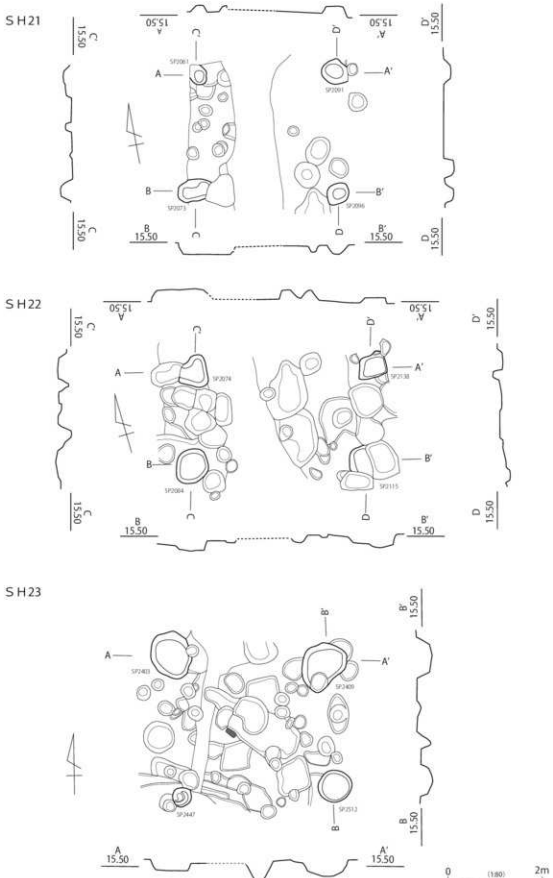


図31　SH21～23

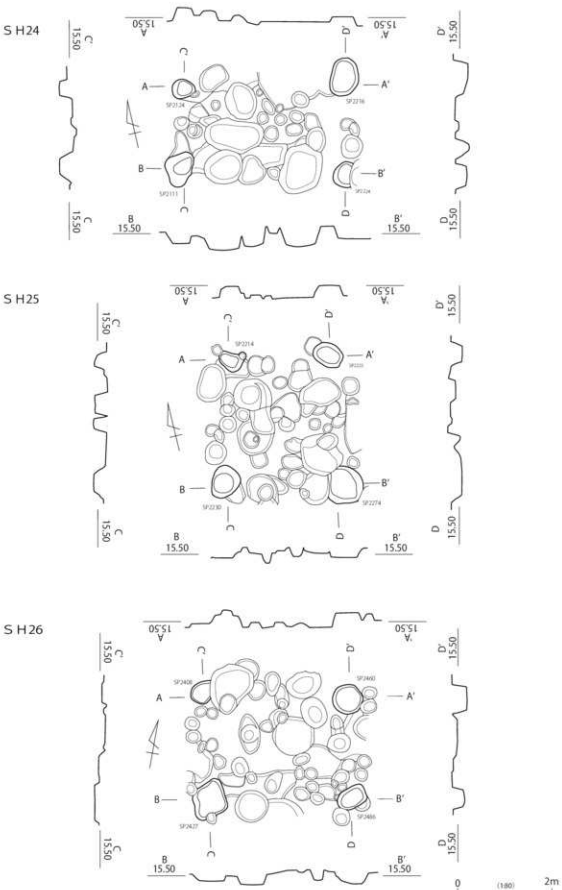

S H24
S H25
S H26
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
15.50
SF2124
SF2216
SF2111
SF2124
SF2214
SF2233
SF2230
SF2274
SF2408
SF2460
SF2427
SF2486
0
(1:80)
2m

図32　S H 24～26

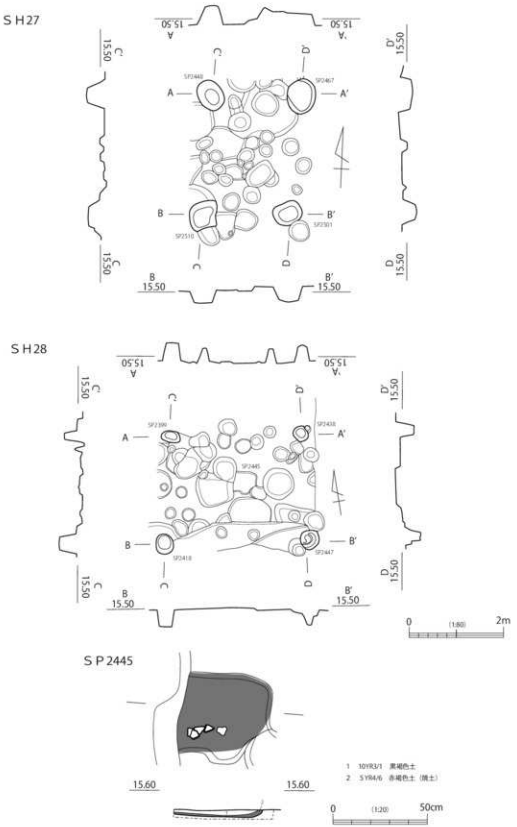


図33　SH 27・28/ SP 2445

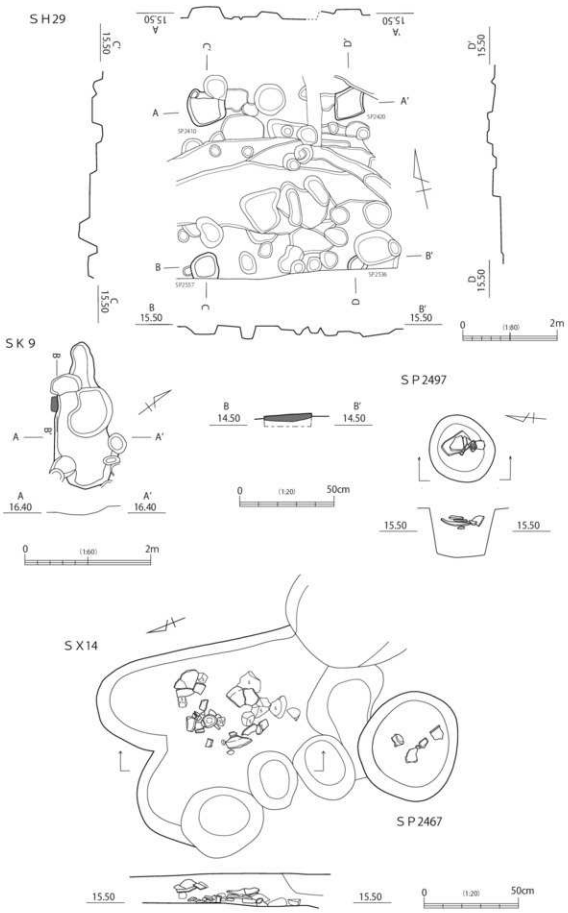


図34　SH29/ SK9/ SP2497/ SX14

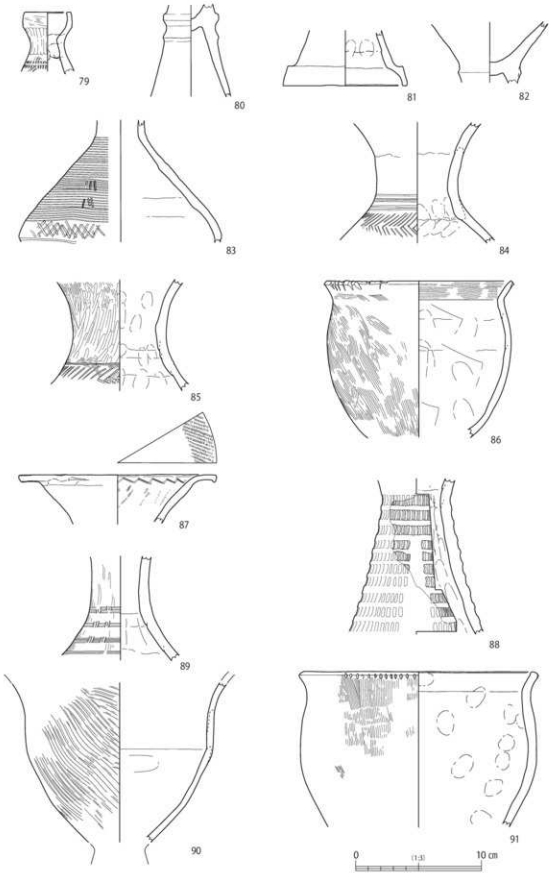


図 35　遺物図版 8

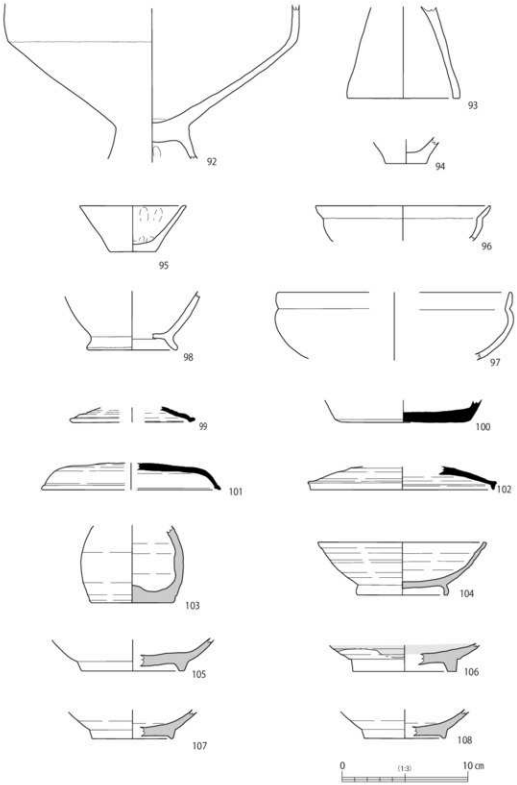

92
93
94
95
96
98
97
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
0
(1:3)
10 cm

図 36　遺物図版 9

表３　遺物観察表

報告書図版番号		調査区	遺構名	大分類	器種	計測値 (cm) 口径	頸・接合部径	最大径	底・脚・器高 高台径		色調			部位	残存		備考
図１	1	12次	SB9	弥生土器	台付甕		[5.4]			(16.2)	外 内	10YR4/1 10YR6/2	褐灰 灰黄褐	体部～脚部		20%	弥生中期　白岩式
図１	2	12次	SB9	弥生土器	壺					(7.3)	外 内	2.5Y5/1 5Y7/1	黄灰 灰白	体部		20%	
図１	3	12次	SB9	弥生土器	壺					(11.1)	外 内	2.5Y5/1 2.5Y5/1	黄灰 黄灰	体部		30%	弥生中期　白岩式
図１	4	12次	SB9	弥生土器	壺				6.8	(4.4)	外 内	2.5Y5/1 2.5Y5/1	黄灰 黄灰	底部		40%	
図１	5	12次	SB9	弥生土器	甕	[30.5]				(8.2)	外 内	10YR7/3 2.5Y7/2	にぶい黄橙 灰黄	口縁部		20%	弥生中期か 浅鉢の甕、台付か
図１	6	12次	SX11	弥生土器	壺		[18.0]			(22.7)	外 内	10YR7/3 2.5Y7/3	にぶい黄橙 灰黄	頸部～底部		60%	
図１	7	12次	SX11	弥生土器	壺		5.5		6.9	(10.5) +(4.3)	外 内	10YR5/1 10YR6/1	褐灰 褐灰	頸部・底部	頸　部 胴　部 底　部	80% 30% 100%	弥生中期　瓜郷式
図２	8	12次	SX11	弥生土器	壺	12.5	5.8			(9.9)	外 内	5Y7/1 10YR6/1	灰白 褐灰	口縁部～頸部	口縁部 頸　部	60% 100%	
図２	9	12次	SX11	弥生土器	壺		[13.0]			(9.9)	外 内	7.5YR7/3 7.5YR7/3	にぶい橙 にぶい橙	口縁部～頸部	口縁部 頸　部	60% 30%	
図２	10	12次	SX11	弥生土器	壺	[9.0]	5.3			(17.0)	外 内	10YR7/3 10YR6/1	にぶい黄橙 褐灰	口縁部～体部	口縁部 頸　部 胴　部	80% 100% 40%	
図２	11	12次	SX11	弥生土器	壺	[23.9]				(10.0)	外 内	10YR7/4 7.5YR7/6	にぶい黄橙 橙	口縁部		20%	弥生中期　白岩式
図２	12	12次	SX11	弥生土器	壺			[38.0]		(22.4)	外 内	10YR5/1 10YR3/1	褐灰 黒褐	体部		20%	縦区画６方向
図３	13	12次	SX11	弥生土器	壺	[13.4]	[7.0]			(17.8)	外 内	10YR7/4 7.5YR7/4	にぶい黄橙 にぶい橙	口縁部～体部	口縁部 頸　部 胴　部	80% 100% 20%	縦区画４方向 弥生中期
図３	14	12次	SX11	弥生土器		[19.3]				(6.5)	外 内	10YR6/3 7.5YR6/6	にぶい黄橙 橙	口縁部		30%	
図３	15	12次	SX11	弥生土器	台付甕					(5.2)	外 内	7.5Y6/4	にぶい橙	脚部		20%	
図３	16	12次	SX11	弥生土器	壺		[7.0]			(5.6)	外 内	10YR5/1	褐灰	頸部		50%	
図３	17	12次	SX11	弥生土器	壺	[5.8]				(7.0)	外 内	10YR8/4	浅黄橙	口縁～頸部		40%	
図３	18	12次	SX11	弥生土器	壺	9.0				(5.0)	外 内	10YR6/4 10YR6/2	にぶい黄橙 灰黄	口縁部		80%	
図３	19	12次	SX11	弥生土器	高杯		[5.3]		[13.8]	(8.5)	外 内	10YR8/3 10YR8/3	浅黄橙 浅黄橙	脚部		20%	脚部外面縦に１条の線刻あり、方向数不明
図３	20	12次	SX11	弥生土器	高杯		[4.8]		[10.0]	(7.5)	外 内 脚内	7.5YR7/4 2.5Y6/1 10YR7/3	にぶい橙 黄灰 にぶい黄橙	脚　部	接合部 脚　部	60% 40%	弥生中期　白岩式
図３	21	12次	SX11	弥生土器	台付甕		[5.6]		[9.2]	(7.0)	外 内	10YR7/4 10YR7/4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	脚部		40%	
図３	22	12次	SX11	弥生土器	壺				6.0	(4.0)	外 内	2.5Y4/1 2.5Y7/1	黄灰 灰白	底部		40%	
図３	23	12次	SX11	弥生土器	壺			[20.5]	[4.6]	(10.0)	外 内	7.5YR7/6 10YR7/2	橙 にぶい黄橙	体部～底部		30%	
図４	24	12次	SX5	弥生土器	壺		[8.4]			(3.5)	外 内	2.5YR3/1 2.5Y7/2	浅黄 灰黄	頸部		40%	
図４	25	12次	SX5	弥生土器	壺		[11.2]			(5.6)	外 内	10YR8/6	黄橙	頸部		70%	
図４	26	12次	SX5	弥生土器	壺	[11.6]				(4.0)	外 内	10YR6/4	にぶい黄橙	口縁部		50%	
図４	27	12次	SX5	弥生土器	壺				[7.5]	(2.5)	外 内	10YR6/4 2.5Y7/2	にぶい黄橙 灰黄色	底部		40%	
図４	28	12次	SX8	弥生土器	壺	[8.7]	[6.2]			(11.6)	外 内	10YR8/3 10YR8/1	浅黄橙 灰白	口縁部～体部		90%	
図４	29	12次	SX8	弥生土器	壺			20.7		(13.8)	外 内	7.5YR6/6 7.5YR7/4	浅黄橙 にぶい橙	体部		70%	
図４	30	12次	SX8	弥生土器	台付甕		[4.6]		[8.1]	(8.8)	外 内	10YR6/2 10YR7/3	灰黄褐 にぶい黄橙	脚部		50%	弥生中期の終わり
図４	31	12次	SX9	弥生土器	壺		5.0			(4.3)	外 内	10YR8/3	浅黄橙	頸部		50%	

報告書図版番号		調査区	遺構名	大分類	器種	計測値 (cm)						色調		部位	残存	備考
						口径	頸・肩合部径	最大径	底・脚・器高高台径							
図4	32	12 次	SX9	弥生土器	壺				3.3	(2.0)	外 内	7.5Y7/4 2.5YR7/1	にぶい橙 灰白	脚部	70%	
図4	33	12 次	SX9	弥生土器	壺				6.8	(2.5)	外 内	7.5Y7/6 2.5YR7/2	橙 灰黄	底部	70%	
図4	34	12 次	SX9	弥生土器	壺		10.6			(6.1)	外 内	10YR6/4 10YR6/2	にぶい黄橙 灰黄			
図4	35	12 次	SX10	弥生土器	壺	[10.8]				(4.2)	外 内	7.5YR7/8 2.5Y8/1	黄橙 灰白	口縁部	30%	
図4	36	12 次	SP19	弥生土器	高杯		[3.2]			(2.3)	外 内	2.5Y6/2 2.5Y6/2	灰黄 灰黄	脚部	50%	
図4	37	12 次	SP19	弥生土器	壺				7.8	(2.7)	外 内	10YR5/6 10YR8/2	黄褐 灰白	底部	50%	
図4	38	12 次	SP242	弥生土器	壺		[12.8]			(4.5)	外 内	7.5Y6/4	にぶい橙	頸部	40%	第 12 次調査区 SB の溝
図4	39	12 次	SP242	弥生土器	壺				(5.7)	(1.7)	外 内	7.5Y6/4	にぶい橙	底部	40%	
図4	40	12 次	SP663	弥生土器	壺					(4.7)	外 内	2.5Y8/2 2.5Y8/1	灰白 灰白	口縁部	40%	
図4	41	12 次	SP242	弥生土器	壺				[6.9]	(2.2)	外 内	10YR7/4	にぶい黄橙	底部	40%	
図4	42	12 次	SP242	弥生土器	壺	[17.8]				(5.0)	外 内	7.5YR6/6	橙	口縁部	80%	第 12 次調査区 SB の溝
図5	43	12 次	SP1023	弥生土器	高杯	26.0				(4.2)	外 内	10YR8/4 10YR7/4	浅黄 にぶい黄橙	口縁部	50%	
図5	44	12 次	SP1023	弥生土器	壺		[11.0]			(4.0)	外 内	10YR7/3 2.5Y7/1	にぶい黄橙 灰白	頸部	40%	
図5	45	12 次	SP190	土師器	甕	[9.8]				(3.9)	外 内	10YR7/4	にぶい黄橙	口縁部	40%	
図5	46	12 次	SP1048	古式土師器	甕	[16.9]	[15.0]			(8.6)	外 内	10YR7/3 10YR8/3 ~10YR6/2	にぶい黄橙 浅黄橙 ~灰黄褐	口縁部	20%	古式土師器（口縁端部先細り、古墳前期か
図5	47	12 次	第 12 次調査区包含層	古式土師器	壺			15.4	4.9	(11.3)	外 内 赤彩	5YR5/6 5YR5/6 2.5YR4/8	明赤褐 明赤褐 赤褐	体部~底部	70%	古式土師器（外面底部の内側ミガキ）
図5	48	12 次	SP656（第 12 次調査区 SH10）	土師器	高杯		3.0		9.0	(5.0)	外 内 脚内	7.5YR7/8 7.5YR7/8 7.5YR7/6	黄橙 黄橙 橙	脚部	接合部 100% 脚　部 80%	
図5	49	12 次	SP943	陶器	椀					(5.2)	(3.2)	外 内 釉薬	10YR6/2 10YR6/2 10YR4/2	灰黄褐 灰黄褐 灰黄色褐色	体部~底部	40%	
図5	50	12 次	SP825	陶器	椀				10.6	(3.7)	外 内 釉薬	7.5YR5/4 7.5YR5/4 7.5YR5/4	にぶい褐 にぶい褐 灰褐	底部	80%	
図5	51	12 次	SP859	土師器	かわらけ	[9.0]				2.6	外 内	10YR8/4 10YR8/4	浅黄橙 浅黄橙	口縁部~体部	50%	第 12 次調査区 SD1 内
図5	52	12 次	SP859	土師器	かわらけ	[9.8]				2.5	外 内	10YR8/4 10YR8/4	浅黄橙 浅黄橙	口縁部~体部	40%	第 12 次調査区 SD1 内
図6	53	13 次	SK5	弥生土器	壺			[20.4]	8.0	(18.2)	外 内	10YR7/1 10YR7/2	灰白 にぶい黄橙	体部~底部	胴　部 40% 底　部 60%	縄文 LR
図6	54	13 次	SK5	弥生土器	壺	15.8	6.1			(11.8)	外 内	7.5YR7/4 2.5Y7/3	にぶい黄橙 浅黄	口縁部~体部	口縁部 30% 頸　部 100%	弥生後期　菊川式 棒状浮文　3 個単位×6 方向か
図6	55	13 次	SK6	弥生土器	壺		[5.7]			(8.0)	外 内	7.5YR5/4 10YR7/3	にぶい褐 にぶい黄橙	頸部	80%	
図6	56	13 次	SP1181	弥生土器	小型壺	9.0	5.2	[9.0]		(8.5)	外 内	5YR6/8 5YR6/8	橙 橙	口縁部~体部	口縁部 80% 頸　部 100% 胴　部 50%	
図6	57	13 次	SP1475	弥生土器	壺	[14.4]	[8.8]			(14.7)	外 内	2.5Y8/2 10YR8/3	灰白 浅黄橙	口縁部~体部	口縁部 30% 頸　部 60% 胴　部 30%	
図6	58	13 次	平面精査	弥生土器	小型壺			11.4	5.4	(7.7)	外 内	7.5YR8/6 7.5YR8/6	浅黄橙 浅黄橙	体部~底部	80%	
図6	59	13 次	撹乱	弥生土器	高杯		[5.0]			(4.4)	外 内	10YR7/4 10YR5/1	にぶい黄橙 褐灰	杯部	50%	
図6	60	13 次	SP1198	弥生土器	高杯		6.0			(8.0	外 内	10YR6/4 10YR6/4	にぶい黄橙 にぶい黄橙	脚部	40%	
図7	61	13 次	SP1927	土師器	高杯	13.1	[4.9]		[8.0]	8.3	外 内	7.5YR6/6 7.5YR6/6	浅黄橙 橙	口縁部~脚部	90%	

報告書図版番号	調査区	遺構名	大分類	器種	計測値(cm) 口径	頸・接合部径	最大径	底・脚・器高 高台径		色調		部位	残存	備考
図7 62	13 次	包含層	土師器	甑	15.2		16.2		(10.8)	外	2.5YR6/8	橙	口縁部～体部	40%	6～7C
										内	2.5YR6/8	橙			
図7 63	13 次	SP1535	土師器	杯身	[12.0]				(4.2)	外	7.5YR6/6	橙	口縁～体部	40%	
										内	7.5YR6/6	橙			
図7 64	13 次	SB15	土師器	壺					[12.0]	(3.5)	外	5Y5/1	灰	底部	30%	
											内	10YR6/3	にぶい黄橙			
図7 65	13 次	SB15	土師器	甕						(3.6)	外	10YR8/4	浅黄橙	頸部	30%	
											内	10YR8/4	浅黄橙			
図7 66	13 次	SH13 (SP1110)	灰釉陶器	椀					[7.0]	(2.0)	外	5Y7/1	灰白	底部	30%	
										内	5Y7/1	灰白			
図7 67	13 次	SP1718	陶器	蓋	[9.8]					(2.9)	外	10YR3/5	暗褐	口縁～体部	30%	
										内	2.5Y5/2	暗灰黄			
図7 68	13 次	SP1415	陶器	壺					[14.6]	(7.7)	外	7.5Y5/4	にぶい褐	底部	30%	外面に自然釉
										内	2.5Y7/2	灰黄			
図7 69	13 次	SP1707	土師器	かわらけ					3.8	(1.4)	外	7.5YR7/6	橙	底部	80%	
										内	7.5YR7/6	橙			
図7 70	13 次	SP1707	土師器	かわらけ					4.0	(1.3)	外	7.5YR7/6	橙	底部	40%	
										内	7.5YR7/6	橙			
図7 71	13 次	搬乱	陶器	椀					5.6	(7.3)	外	5Y6/3	オリーブ黄	口縁～底部	30%	外面に釉薬
										内	7.5YR5/4	にぶい褐			
図7 72	13 次	搬乱	陶器	椀	[38.8]					(9.0)	外	2.5Y8/2	灰白	口縁～体部	20%	内面、外面に釉薬
										内	2.5Y8/2	灰白				
図7 73	13 次	搬乱	陶器	椀	[11.6]					(5.5)	外	5Y6/2	灰オリーブ	口縁～体部	20%	内面、外面に釉薬
										釉	5Y4/3	暗オリーブ				
図7 74	13 次	搬乱	陶器	碗	[13.0]				5.4	4.4	外	5Y7/1	灰白	口縁部～高台部	80%	粗成
										内	5Y8/1	灰白				
図7 75	13 次	表採	陶器	椀	[12.1]					(6.6)	外	2.5Y6/3	にぶい黄	口縁～底部	30%	内面、外面に釉薬
										内	2.5Y6/3	にぶい黄				
										釉	7.5Y6/3	オリーブ黄				
図7 76	13 次	表採	陶器	椀					[4.2]	(2.9)	外	10YR7/3	にぶい黄橙	底部	80%	内面、外面に釉薬
										釉	5YB/1	灰				
図7 77	13 次	表採	陶器	椀					[4.2]	(2.2)	外	5YB/2	灰白	底部	80%	内面、外面に釉薬
										釉	5Y2/2	オリーブ黄				
図7 78	13 次	搬乱	灰釉陶器	皿	[13.2]				[7.0]	3.0	外	7.5Y7/2	灰白	口縁部～高台部	30%	見込みにトチン痕あり
										内	7.5Y7/1	灰白				
										釉	7.5Y6/3	オリーブ黄				
図8 79	14 次	SK7	弥生土器	壺	[3.8]					(4.9)	外	10YR7/4	にぶい黄橙	口縁部	80%	
										内	10YR7/4	にぶい黄橙				
図8 80	14 次	SK7	弥生土器	高杯		[4.4]				(7.3)	外	2.5Y6/4	にぶい黄	脚部	70%	
										内	2.5Y6/4	にぶい黄				
図8 81	14 次	SD23	弥生土器	高杯					[9.8]	(4.4)	外	10YR7/6	明黄褐	脚部	40%	
										釉	10YR7/6	明黄褐				
図8 82	14 次	SP2113	弥生土器	高杯		[5.0]				(4.8)	外	10YR7/4	にぶい黄橙	杯部	30%	
										釉	10YR7/4	にぶい黄橙				
図8 83	14 次	SD26	弥生土器	壺			[16.0]			(9.7)	外	2.5Y5/1	黄灰	体部	20%	
										釉	2.5Y4/1	黄灰				
図8 84	14 次	SD26	弥生土器	壺		6.4				(9.6)	外	7.5YR8/4	浅黄橙	頸部	90%	
										内	10YR7/4	にぶい黄橙				
図8 85	14 次	SP2139	弥生土器	壺		[7.4]				(8.9)	外	10YR7/3	にぶい黄橙	頸部	30%	弥生後期　菊川式の新相
										内	10YR6/2	灰黄褐				
図8 86	14 次	SP2234	弥生土器	甕	[14.6]		[14.6]			(12.5)	外	2.5Y3/2	黒褐	口縁部～体部	10%	
										内	7.5YR7/4	にぶい橙				
図8 87	14 次	SP2374	弥生土器	壺	[15.6]					(4.0)	外	10YR6/4	にぶい黄橙	杯部	20%	
										釉	10YR7/1	灰白				
図8 88	14 次	SX14	弥生土器	壺		[5.4]				(12.4)	外	7.5YR7/4	にぶい橙	頸部	30%	爪形沈線　弥生中期　櫛田式
										内	7.5YR8/3	浅黄橙				
図8 89	14 次	SX14	弥生土器	壺		[4.5]				(8.3)	外	7.5YR8/6	浅黄橙	頸部	30%	丁字文　2 個単位×4 方向か
										内	7.5YR6/3	にぶい橙				
図8 90	14 次	SX14	弥生土器	甕						(12.7)	外	7.5YR6/6	橙	体部	20%	弥生中期　櫛田式か白岩式古相
										内	7.5YR7/6	橙				
図9 91	14 次	SX14	弥生土器	甕	[18.0]					(12.4)	外	7.5YR8/4	浅黄橙	口縁部～体部	30%	
										内	2.5Y8/2	灰白				
図9 92	14 次	搬乱	弥生土器	台付甕			[23.6]		(12.3)	外	7.5YR7/6	橙	口縁～体部	20%	
										内	7.5YR7/6	橙			
図9 93	14 次	SP2470	弥生土器	台付甕					9.0	(7.3)	外	5Y3/1	オリーブ黒	脚部	20%	
										釉	10YR6/4	にぶい黄橙				
図9 94	14 次	SP2511	弥生土器	壺					[3.2]	(2.0)	外	10YR7/4	にぶい黄橙	底部	50%	
										釉	10YR5/1	褐灰				

報告書図版番号		調査区	遺構名	大分類	器種	計測値 (cm)					色調			部位	残存	備考
						口径	頸・腹合部径	最大径	底・脚・高台径	器高						
図 9	95	14 次	SP2514	弥生土器	小型鉢	[8.4]			[3.6]	3.7	外	5Y3/1	オリーブ黒	口縁～底部	60%	
											触	10YR6/4	にぶい黄橙			
図 9	96	14 次	SP2532	土師器	鉢	[13.8]				(2.8)	外	2.5Y6/8	橙	口縁部	20%	
											触	2.5Y6/8	橙			
図 9	97	14 次	SP2514	土師器	鉢					(5.4)	外	2.5Y6/1	黄灰	口縁～体部	20%	
											触	7.5YR6/6	橙			
図 9	98	14 次	SP2511	土師器	椀				[7.0]	(4.7)	外	7.5YR7/6	橙	底部	20%	
											触	7.5YR7/6	橙			
図 9	99	14 次	平面精査	須恵器	蓋					(2.2)	外	5Y6/1	灰	口縁部	20%	
											触	5Y6/1	灰			
図 9	100	14 次	平面精査	須恵器	杯身				[10.8]	(1.8)	外	2.5Y6/1	黄灰	口縁～底部	50%	
											触	2.5Y6/1	黄灰			
図 9	101	14 次	平面精査	須恵器	杯蓋	[14.6]				(1.9)	外	5Y6/1	灰	口縁～体部	20%	
											触	5Y6/1	灰			
図 9	102	14 次	平面精査	須恵器	蓋	[15.6]				(2.1)	外	5Y5/1	灰	口縁～体部	20%	
											触	5Y5/1	灰			
図 9	103	14 次	平面精査	灰釉陶器	壺				[6.4]	(6.2)	外	2.5Y6/1	黄灰	体部～底部	30%	
											触	2.5Y6/1	黄灰			
図 9	104	14 次	平面精査	灰釉陶器	椀	[13.4]			[7.2]	(4.2)	外	2.5Y6/1	黄灰	底部	50%	
											触	2.5Y6/1	黄灰			
図 9	105	14 次	平面精査	陶器	椀				[8.2]	(2.3)	外	7/	灰白	底部	40%	
											触	7/	灰白			
図 9	106	14 次	平面精査	陶器	椀				[8.2]	(2.52	外	2.5Y7/4	浅黄色	底部	40%	
											触	2.5Y5/6	黄褐色			
図 9	107	14 次	SP2081	陶器	椀				[6.0]	(1.8)	外	7.5Y7/1	灰白	底部	40%	内面自然釉
											触	7.5Y4/3	暗オリーブ			
図 9	108	14 次	SP2360	陶器	椀				[6.4]	(2.2)	外	5Y7/1	灰白	底部	30%	
											触	5Y7/1	灰白			

第５章　まとめ

平成 30 年度の発掘調査では、弥生時代から近世にかけての遺構や遺物を確認した。これまで主に大門遺跡の東側で行われていた調査でもおおよそ同じ時期のものが確認されており、大門遺跡全域で長期にわたる遺構や遺物を確認することができると推測する。中でも弥生時代中期から後期にかけてのものが多く、古代・近世の遺物をともなう遺構はわずかであった。なお、丘陵上にある大門遺跡では自然堆積が薄く、ほぼ同一の面に複数の時期の遺構が重なるようにある。出土遺物を中心に時期を判定しているが、古い時代のものを含んでいる可能性がある。

弥生時代の遺構と土器

弥生時代の遺構として、竪穴住居、掘立柱建物、土坑などを検出した。特に第 12 次調査では壁溝をもつ竪穴住居や掘立柱建物を複数確認することができ、居住域であると推測することができる。対して大門遺跡の南端部にあたる第 13・14 次調査区では、明確な竪穴住居等は確認できていない。南西に向かってゆるやかに傾斜しており、12 次調査区と 13・14 次調査区では遺構面に約５ｍの標高差がある。地形等を考慮して住宅を建設していた可能性がある。

出土遺物には嶺田式や白岩式の壺類などもみられるが、菊川式土器の出土量が突出している。太田川流域の鶴松遺跡などと同様に弥生時代中期中葉に興り、弥生時代後期にかけて継続的に集落を拡大をしていったと推測する。12 次調査区ＳＸ 11 は一括性の高い資料として、白岩式土器の良好な資料群である。瓜郷式の特徴を持つ壺も出土しており、西遠江との交流を伺うことができる。

古墳時代以降の遺構と土器

古墳時代の遺構としては、12・13 次調査の掘立柱建物やピットが挙げられる。12 次調査区の北側で総柱建物と推定されるものを３棟検出した。倉庫としての用途も考えられ、今後隣接地の調査成果に注意していきたい。

掛之上遺跡との関連が期待された奈良時代の遺構は明確なものは確認できなかった。奈良時代の遺物は包含層土中より出土したものが多数である。

区画整理事業にともなう発掘調査は令和４年度現在も引き続き行われている。遺跡の面としての配置等を、次年度以降引きつづき検討していきたい。

≪引用参考文献≫

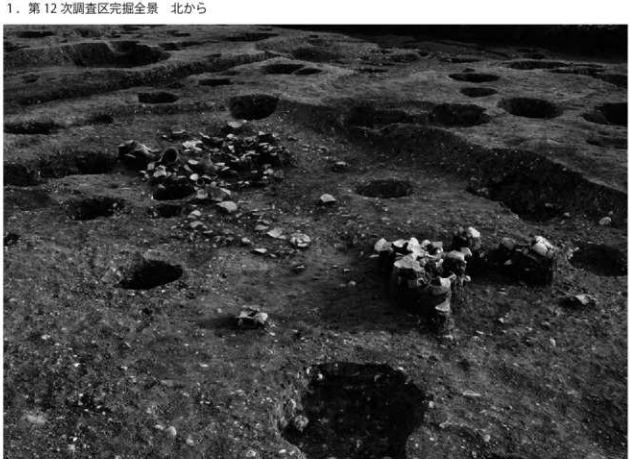
静岡県　1990 『静岡県史』資料編古代１
袋井市　1983 『袋井市史』通史編
袋井市教育委員会　1983 『大門遺跡　大門Ⅰ遺跡第２次発掘調査報告書』
袋井市教育委員会　1987 『大門大塚古墳　昭和 61 年基礎資料収集調査報告書』
袋井市教育委員会　1988 『大門遺跡　袋井市大門遺跡第４次発掘調査報告書』
袋井市教育委員会　1990 『大門遺跡Ⅴ　大門Ⅰ遺跡第５次発掘調査報告書』
袋井市教育委員会　1992 『団子塚遺跡―遺構編―』
袋井市教育委員会　1992 『土橋遺跡Ⅴ』太平住宅株式会社建売住宅用宅地造成事業に伴う緊急発掘調査報告書　ほか
袋井市教育委員会　1995 『坂尻遺跡―遺物・総括編―』
袋井市教育委員会　1997 『鶴松遺跡Ⅸ』（主）浜北袋井線単交通安全施設　１種工事に伴う発掘調査報告書　ほか
袋井市教育委員会　2004 『愛野向山Ⅱ遺跡』愛野向山Ⅱ遺跡・愛野向山Ｂ古墳群発掘調査報告書
袋井市教育委員会　2008 『袋井市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
袋井市教育委員会　2015 『掛之上遺跡』袋井駅前第二土地区画整理事業に伴う第 95 次～106 次発掘調査報告書ほか
松井一明　1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
松井一明　1992 「考察―中遠地域の竪穴住居の編年的様相」『鶴松遺跡Ⅴ』袋井市教育委員会

写真図版

1．大門遺跡近景　南西から

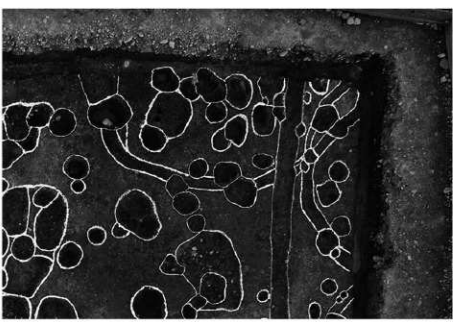
2．第 12 次調査区完掘全景　南から

１．第 12 次調査区完掘全景　北から



２．第 12 次調査区ＳＸ 11 土器出土状況　北西から

1．第 12 次調査区
ＳＢ１・２



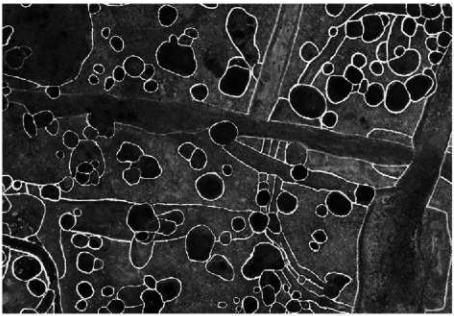
2．第 12 次調査区
ＳＢ３・４

3．第 12 次調査区
ＳＢ５　北から

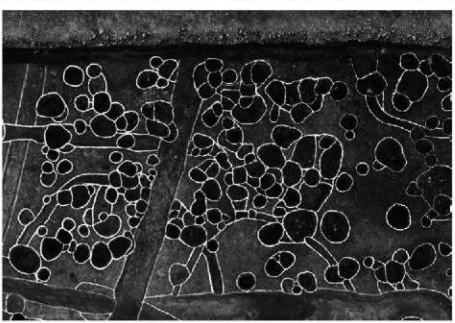
1．第 12 次調査区
　ＳＢ８　西から

2．第 12 次調査区
　ＳＢ９　南から

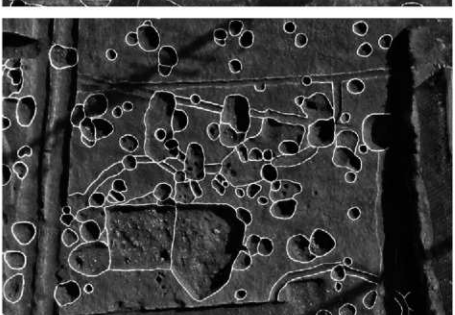
3．第 12 次調査区
　ＳＢ 11　北から



1．第 12 次調査区ＳＨ１



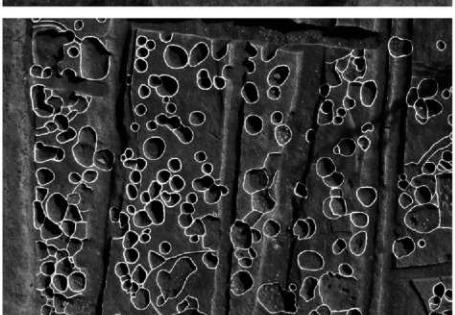
2．第 12 次調査区
ＳＨ２～４



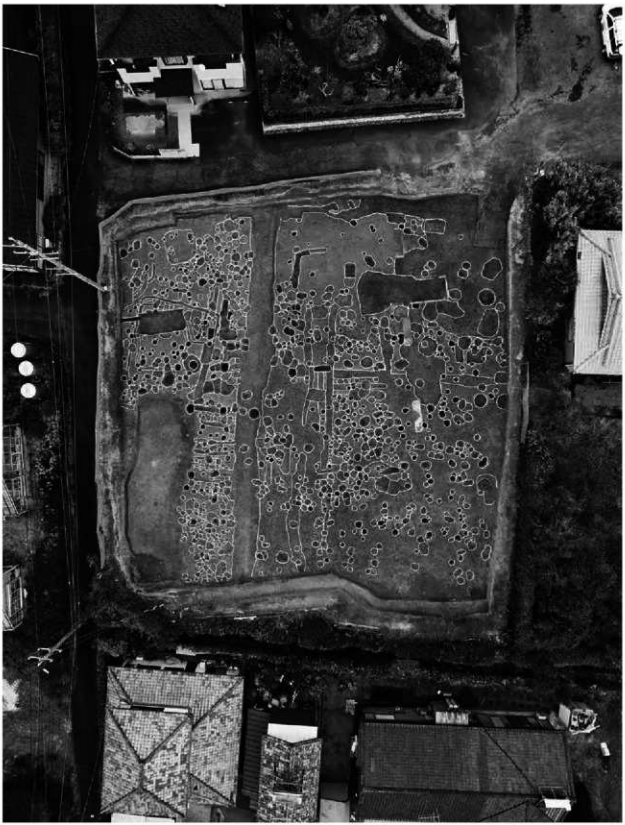
3．第 12 次調査区
ＳＨ５/ＳＢ 13・14

１．第 12 次調査区
ＳＨ６・７

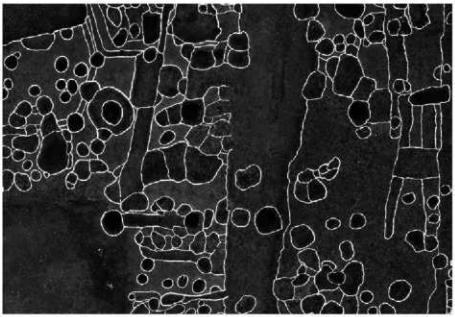
２．第 12 次調査区ＳＨ６
北西から



３．第 12 次調査区
ＳＨ８～ 10



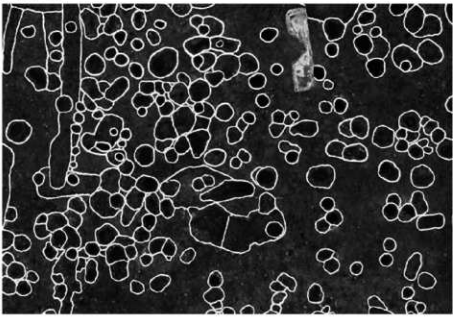
1．第 13 次調査区　完掘全景



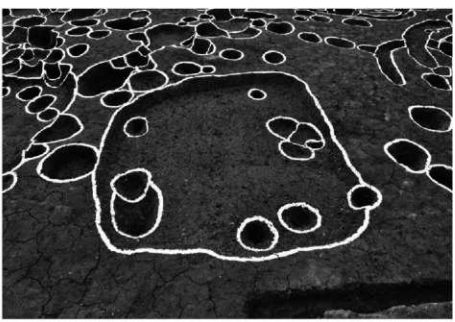
１．第 13 次調査区ＳＨ 11

２．第 13 次調査区ＳＨ 12
北から

３．第 13 次調査区ＳＨ 13
北から



1．第 13 次調査区
ＳＨ 15・18・19

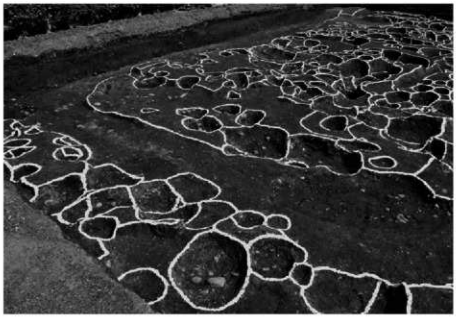


2．第 13 次調査区ＳＢ２
北から

3．第 13 次調査区ＳＫ５
西から

1．第 14 次調査区完掘全景　東から

2．第 14 次調査区ＳＤ 23　東から

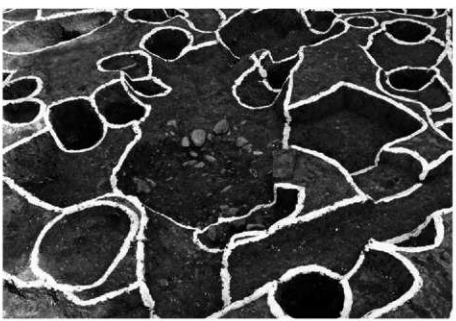


1．第 14 次調査区ＳＨ 21
南西から

2．第 14 次調査区ＳＨ 25
北から

3．第 14 次調査区
ＳＨ 26・27 北東から

1．第 14 次調査区ＳＨ 28
南から



2．第 14 次調査区ＳＫ７
南西から

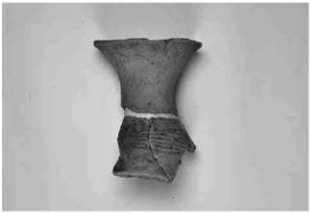
3．第 14 次調査区ＳＸ 14
西から

1. 遺物 11・1

2. 遺物 10

3. 遺物 12

1．遺物9



2．遺物 13

3．遺物 14

4．遺物 19

5．遺物 28

6．遺物 29

7．遺物 30

8．遺物 47

1．遺物 48

2．遺物 53

3．遺物 54

4．遺物 56

5．遺物 58

6．遺物 61

7．遺物 78

8．遺物 88

報告書抄録

ふりがな	だいもんいせき
書　名	大門遺跡
副 書 名	袋井駅南土地区画整理事業に伴う第 12 ～ 14 次発掘調査報告書
シリーズ名	袋井駅南土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ番号	1
編著者名	原未貴
編集機関	静岡県袋井市教育委員会
所 在 地	〒 437 － 0013 静岡県袋井市新屋 1 丁目 2 － 1 電話　0538-23-9264
発行年月日	令和 5（2023）年 3 月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
だいもんいせき 大門遺跡	ふくろいしたかお 袋井市高尾 1117 － 1 外	22216	157	34°44′28.59″	137°55′40.41″	平成 30(2018) 年 7 月 2 日～平成 31(2019) 年 3 月 15 日	2,331㎡	袋井市袋井駅南土地区画整理事業に伴う土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大門遺跡	集落跡	弥生時代 中・後期	竪穴住居、 掘立柱建物、溝、 土坑、ピット	弥生土器	
		古墳時代 前・後期	掘立柱建物、ピット	土師器、須恵器	
		古代 中世	竪穴住居、掘建柱建物、柵列、ピット	灰釉陶器、陶器、かわらけ	
		近世	土壙墓、溝	銅銭	

大門遺跡

袋井駅南土地区画整理事業に伴う
第 12 ～ 14 次発掘調査報告書

発　行　　令和５（2023）年３月 24 日
編　集　　静岡県袋井市教育委員会
〒 437 － 0013
静岡県袋井市新屋１丁目２－１
電話　0538-23-9264
発行者　　静岡県袋井市教育委員会
印　刷　　松本印刷株式会社